

1. レッドデータブック作成の目的と背景

(1) レッドデータブックの役割

我が国では、昭和 30 年代から 40 年代にかけての高度経済成長期以降、開発による自然環境の改変、社会経済状況やライフスタイルの変化による農林業の衰退に伴う里地里山の荒廃、外来種による生態系の攪乱などによって、豊かな自然が失われ、絶滅する野生生物も生じるようになった。

野生生物を人為的に絶滅させないためには、絶滅のおそれのある種を的確に把握し、一般への理解を広める必要がある。

レッドデータブックとは、野生生物の種を絶滅のおそれのある程度（カテゴリー）に応じてランク付けをし、その生息・生育状況などについて解説した資料集である。レッドデータブックは、規制等の法律上の効果を持つものではないが、絶滅のおそれのある野生生物の保護を進めていくための基礎的な資料として広く普及を図り、野生生物への関心を高めるとともに、各種開発事業の環境影響評価などに活用され、自然環境保全への配慮が促進されることを目的としている。

環境省では、平成 3 年度の全国版レッドデータブック（動物編）発行以降、順次レッドリストの見直しが行われ、平成 24 年度には第 4 次レッドリストが公表されている。これらを受けて各都道府県等でも絶滅危惧種に関する調査が進められ、地域版のレッドリストやレッドデータブックが作成されている。愛知県では、平成 13 年度にレッドデータブックが発行され、その後の見直しを経て、平成 20 年度には「レッドデータブックあいち 2009 植物編」及び「同 動物編」が発行されている。名古屋市では、平成 16 年にレッドデータブックが発行され、その後の見直しを経て、平成 22 年度には「レッドデータブックなごや 2010 -2004 年版補遺-」が発行されている。

(2) 岡崎市版レッドデータブックの意義

野生生物は、各地域の自然環境特性に適応して生息・生育している。このため、これらの野生生物を的確に保護し、生物多様性の保全を図るためには、全国的な情報と併せ、都道府県や市町村等の行政区画単位で地域特性ごとにきめ細かな情報整理を行う必要がある。

岡崎市では、本市における野生生物の現状を的確に把握し、その保護と生物多様性の保全を図るため、「岡崎市版レッドリスト」を作成し、平成 25 年 3 月に公表した。このリストの作成においては、学識経験者で構成する「岡崎市自然環境調査検討委員会」を中心に、市内に生息・生育する野生生物の現況調査を行うとともに市民からも情報や意見を求め、本市の環境特性や開発圧の強度などの地域特性を考慮して絶滅のおそれを評価した。その後、平成 25 年 9 月末日までの情報を加えた最新のレッドリストを作成、掲載種の概要や保全上の留意点などの解説を記述し「レッドデータブックおかざき 2014」（本書）としてとりまとめた。本書は、本市における絶滅のおそれのある野生生物の種に関する情報について広く市民の方々に普及を図り、これらの種の保存への理解を広めるとともに、各種開発事業の環境影響評価などの基礎資料として用いられることによって、本市固有の自然環境保全への配慮を促すことを目的としたものである。

今後本市では、希少野生動植物の保護への取組みとして、本書に基づき継続したモニタリング調査を行い、市域で絶滅のおそれのある種を対象に保護活動を行う計画である。また、本書掲載種の中でも特に保護の優先度の高い種については、さらに調査を進めた上で必要に応じ、岡崎市自然環境保全条例に基づく指定希少野生動植物種に指定し、保護を図る計画である。

2. 調査の概要

(1) 調査対象

① 維管束植物

維管束植物の種（亜種、変種を含む）を単位とし、標本あるいは文献等により、岡崎市に確実に生育している（いた）と判断された種のうち、人為的に移入された種を除く種を調査対象とした。

調査対象範囲は、岡崎市内の陸上及び陸水中とした。

② 哺乳類

哺乳類の種（亜種を含む）を単位とし、標本あるいは文献等により、岡崎市に確実に生息している（いた）と判断された種のうち、人為的に移入された種及び一過性の確認種を除く種を調査対象とした。

調査対象範囲は、岡崎市内の陸上及び陸水中とした。

検討対象期間は縄文時代草創期（約 1 万年前）から現在までとし、後期更新世以前の化石として産出した種は検討対象としなかった。

③ 鳥 類

鳥類の種を単位とし、文献、調査記録、観察記録等により、岡崎市に確実に生息している（いた）と判断された種のうち、人為的に移入された種及び不定期または偶発的に記録される種を除く種を調査対象とした。

調査対象範囲は、岡崎市内の陸上及び陸水中とした。

④ 爬虫類

爬虫類の種（亜種を含む）を単位とし、標本あるいは文献等により、岡崎市に確実に生息している（いた）と判断された種のうち、人為的に移入された種を除く種を調査対象とした。

調査対象範囲は、岡崎市内の陸上及び陸水中とした。

⑤ 両生類

両生類の種（亜種を含む）を単位とし、標本あるいは文献等により、岡崎市に確実に生息している（いた）と判断された種のうち、人為的に移入された種を除く種を調査対象とした。

調査対象範囲は、岡崎市内の陸上及び陸水中とした。

⑥ 魚 類

魚類の種（亜種を含む）を単位とし、標本あるいは文献等により、岡崎市に確実に生息している（いた）と判断された種のうち、人為的に移入された種を除く種を調査対象とした。

調査対象範囲は、岡崎市内の陸水中（河川、湖沼等）とした。

⑦ 昆虫類

昆虫類の種（亜種を含む）を単位とし、標本あるいは文献等により、岡崎市に確実に生息している（いた）と判断された種のうち、人為的に移入された種及び一過性の確認種を除く種を調査対象とした。なお、一部の目では、近隣の市町村における生息状況から本市での生息の可能性が高いと

考えられる種も対象とした。

調査対象範囲は、岡崎市内の陸上及び陸水中とした。

⑧ クモ類

クモ類の種を単位とし、標本あるいは文献等により、岡崎市に確実に生息している（いた）と判断された種のうち、人為的に移入された種を除く種を調査対象とした。

調査対象範囲は、岡崎市内の陸上及び陸水中とした。

⑨ 貝類

貝類の種（亜種を含む）を単位とし、標本あるいは文献等により、岡崎市に確実に生息している（いた）と判断された種のうち、人為的に移入された種を除く種を調査対象とした。

調査対象範囲は、岡崎市内の陸上及び陸水中とした。

(2) 調査体制

調査の実施に当たっては、平成 20 年度に野生動植物に関する専門の学識経験者で構成される「岡崎市自然環境調査検討委員会」を設置し、調査内容、調査の進め方等を検討した。また、レッドデータブック作成にあたり、評価方法、評価結果等を検討した。

実際の調査及びレッドデータブック作成に関する作業は委員及び協力者が分類群毎に実施した。また、委員は検討委員会において担当する分類群の作業状況を報告するとともに、分類群間での連絡調整を行った。

検討委員会の体制及び委員は表 1 のとおりである。

表 1 岡崎市自然環境調査検討委員会の構成

専門分野等	委員
植物類 (維管束植物)	せんがとしゆき 千賀敏之 (岡崎市動植物調査会)
	あだちふみゆき 安達史幸 (岡崎市動植物調査会) (故人)
哺乳類	こやすかずひろ 子安和弘 (愛知学院大学歯学部講師)
鳥類	こじまよしだけ 小嶋良武 (岡崎野鳥の会)
爬虫類	やべ たかし 矢部 隆 (日本カメ自然誌研究会代表)
両生類・魚類	ながい ただし 永井 貞 (岡崎市動植物調査会)
昆虫類	おおひらひとお 大平仁夫 (岡崎国立共同研究機構生理学研究所名誉技官)
	すぎさかよしり 杉坂美典 (日本鱗翅学会)
クモ類	おがたきよと 緒方清人 (日本蜘蛛学会評議員)
貝類	きむらしょういち 木村昭一 (日本貝類学会評議員)

(3) 調査方法

調査は、平成 20 年度から平成 25 年度にかけて、各分類群別に以下の方法により実施した。

① 維管束植物

調査対象種について、文献調査、標本調査及び現地調査により生育状況の把握を行った。

- ・ 文献調査

既存の文献を収集し、生育場所、確認時期等を調査した。

- ・ 標本調査

既存の標本に関する情報を収集し、生育場所、確認時期等を調査するとともに、必要に応じて未同定標本の同定を行った。

- ・ 現地調査

現地踏査を行い、生育状況を調査するとともに、必要に応じて文献調査及び標本調査で把握した既知産地の現状についても調査した。

② 哺乳類

調査対象種について、文献調査、標本調査及び現地調査により生息状況の把握を行った。

- ・ 文献調査

既存の文献を収集し、生息場所、確認時期等を調査した。

- ・ 標本調査

既存の標本に関する情報を収集し、生息場所、確認時期等を調査するとともに、必要に応じて未同定標本の同定を行った。

- ・ 現地調査

現地踏査を行い、生息状況を調査するとともに、必要に応じて文献調査及び標本調査で把握した既知産地の現状についても調査した。

③ 鳥 類

調査対象種について、文献調査、現地調査により生息状況の把握を行った。

- ・ 文献調査

既存の文献、調査記録、観察記録等を収集し、生息場所、確認時期等を調査した。

- ・ 現地調査

現地踏査を行い、生息状況を調査するとともに、必要に応じて文献調査で把握した既知産地の現状についても調査した。

④ 爬虫類

調査対象種について、文献調査、現地調査により生息状況の把握を行った。

- ・ 文献調査

既存の文献を収集し、生息場所、確認時期等を調査した。

- ・ 現地調査

現地踏査を行い、生息状況を調査するとともに、必要に応じて文献調査で把握した既知産地の現状についても調査した。

⑤ 両生類

調査対象種について、文献調査、現地調査により生息状況の把握を行った。

・文献調査

既存の文献を収集し、生息場所、確認時期等を調査した。

・現地調査

現地踏査を行い、生息状況を調査するとともに、必要に応じて文献調査で把握した既知産地の現状についても調査した。

⑥ 魚類

調査対象種について、文献調査、現地調査により生息状況の把握を行った。

・文献調査

既存の文献を収集し、生息場所、確認時期等を調査した。

・現地調査

現地踏査を行い、生息状況を調査するとともに、必要に応じて文献調査で把握した既知産地の現状についても調査した。

⑦ 昆虫類

調査対象種について、文献調査、標本調査及び現地調査により生息状況の把握を行った。

・文献調査

既存の文献を収集し、生息場所、確認時期等を調査した。

・標本調査

既存の標本に関する情報を収集し、生息場所、確認時期等を調査するとともに、必要に応じて未同定標本の同定を行った。

・現地調査

現地踏査を行い、生息状況を調査するとともに、必要に応じて文献調査及び標本調査で把握した既知産地の現状についても調査した。

⑧ クモ類

調査対象種について、文献調査、標本調査及び現地調査により生息状況の把握を行った。

・文献調査

既存の文献を収集し、生息場所、確認時期等を調査した。

・標本調査

既存の標本に関する情報を収集し、生息場所、確認時期等を調査するとともに、必要に応じて未同定標本の同定を行った。

・現地調査

現地踏査を行い、生息状況を調査するとともに、必要に応じて文献調査及び標本調査で把握した既知産地の現状についても調査した。

⑨ 貝類

調査対象種について、文献調査、標本調査及び現地調査により生息状況の把握を行った。

・文献調査

既存の文献を収集し、生息場所、確認時期等を調査した。

・標本調査

既存の標本に関する情報を収集し、生息場所、確認時期等を調査するとともに、必要に応じて未同定標本の同定を行った。

・現地調査

現地踏査を行い、生息状況を調査するとともに、必要に応じて文献調査及び標本調査で把握した既知産地の現状についても調査した。

(4) 評価の区分及び方法

各調査対象種の絶滅のおそれの程度について、収集された情報を基に岡崎市内の分布の状況等を勘案して総合的に判断・評価を行い、表 2 (植物) 及び表 3 (動物) に示す評価区分基準により絶滅のおそれの程度を判定した。

動物の「絶滅」の評価については、「過去に確実に生息していた種」と判断する文献や標本の整備状況及び移動能力が分類群毎に異なることから、表 4 に示す要件により判定した。

なお、評価区分のうち野生絶滅は、今回のレッドデータブックでは絶滅とあわせ、絶滅・野生絶滅として扱うこととした(ただし、表記上は絶滅 (EX) とした)。

判定の結果は、「レッドデータブックおかざき 2014」の基礎となる「岡崎市版レッドリスト(案)」としてとりまとめた。また、レッドリストの精度の充実を図るため、平成 24 年 9 月～10 月に市民意見及び情報の収集を行った。これらを勘案し、「岡崎市版レッドリスト」としてとりまとめ、平成 25 年 3 月に公表した。更に平成 25 年 9 月末日までの情報を加えて最終的な判定を行い、最新のレッドリストとして本書に掲載した。

表2 「レッドデータブックおかげき 2014」の評価区分基準【植物】

区分及び基本概念		定性的要件		
絶滅 Extinct (EX) ・ 野生絶滅 Extinct in the Wild (EW)	岡崎市ではすでに絶滅したと考えられる種。野生では絶滅し、栽培下でのみ存続している種。	過去に岡崎市に生育したことが確認されており、岡崎市において少なくとも野生ですでに絶滅したと考えられる種（栽培下では存続している種を含む）。 【確実な情報があるもの】 1 今回の調査や記録により、すでに野生で絶滅したことが確認された。 【情報量が少ないもの】 2 過去50年間前後の間に、信頼できる生育の情報が得られていない。		
絶滅危惧 I 類 Critically Endangered + Endangered (CR+EN)	絶滅の危機に瀕している種。現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、野生での存続が困難なもの。	次のいずれかに該当する種。 【確実な情報があるもの】 1 既知のすべての個体群で、危機的水準にまで減少している。 2 既知のすべての生育地で、生育条件が著しく悪化している。 3 既知のすべての個体群がその再生産能力を上回る採取圧にさらされている。 4 ほとんどの分布域に交雑のおそれのある別種が侵入している。 【情報量が少ないもの】 5 それほど遠くない過去(30年～50年)の生育記録以後確認情報がなく、その後信頼すべき調査が行われていないため、絶滅したかどうかの判断が困難なもの。	絶滅危惧 I A 類 (CR)	ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの。
			絶滅危惧 I B 類 (EN)	I A 類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの。
絶滅危惧 II 類 Vulnerable (VU)	絶滅の危険が増大している種。現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、近い将来「絶滅危惧 I 類」のランクに移行することが確実と考えられるもの。	次のいずれかに該当する種 【確実な情報があるもの】 1 大部分の個体群で個体数が大幅に減少している。 2 大部分の生育地で生育条件が明らかに悪化しつつある。 3 大部分の個体群がその再生産能力を上回る採取圧にさらされている。 4 分布域の相当部分に交雑可能な別種が侵入している。		
準絶滅危惧 Near Threatened (NT)	存続基盤が脆弱な種。現時点での絶滅危険度は小さいが、生育条件の変化によっては「絶滅危惧」として上位ランクに移行する要素を有するもの。	次に該当する種。 生育状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。具体的には、分布域の一部において、次のいずれかの傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。 1 個体数が減少している。 2 生育条件が悪化している。 3 過度の採取による圧迫を受けている。 4 交雑可能な別種が侵入している。		
情報不足 Data Deficient (DD)	評価するだけの情報が不足している種。	環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧のカテゴリーに移行し得る属性(具体的には、次のいずれかの要素)を有しているが、生育状況をはじめとして、ランクを判定するに足る情報が得られていない種。あるいは確認例が極めて少なく、希少であるか否かも不明な種。 1 どの生育地においても生育密度が低く希少である。 2 生育地が極限されている。 3 生物地理上、孤立した分布特性を有する(分布域がごく限られた固有種等)。 4 生活史の一部または全部で特殊な環境条件を必要としている。		

表3 「レッドデータブックおかげき 2014」の評価区分基準【動物】

区分及び基本概念		定性的要件		
絶滅 Extinct (EX) ・ 野生絶滅 Extinct in the Wild (EW)	岡崎市ではすでに絶滅したと考えられる種。 野生では絶滅し、飼育下でのみ存続している種。	過去に岡崎市に生息したことが確認されており、岡崎市において少なくとも野生ですでに絶滅したと考えられる種（飼育下では存続している種を含む）。 【確実な情報があるもの】 1 今回の調査や記録により、すでに野生で絶滅したことが確認された。 【情報量が少ないもの】 2 過去50年間前後の間に、信頼できる生息の情報が得られていない。		
絶滅危惧 I 類 Critically Endangered + Endangered (CR+EN)	絶滅の危機に瀕している種。 現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、野生での存続が困難なもの。	次のいずれかに該当する種。 【確実な情報があるもの】 1 既知のすべての個体群で、危機的水準にまで減少している。 2 既知のすべての生息地で、生息条件が著しく悪化している。 3 既知のすべての個体群がその再生産能力を上回る捕獲圧にさらされている。 4 ほとんどの分布域に交雑のおそれのある別種が侵入している。 【情報量が少ないもの】 5 それほど遠くない過去(30年～50年)の生息記録以後確認情報がなく、その後信頼すべき調査が行われていないため、絶滅したかどうかの判断が困難なもの。	絶滅危惧 I A 類 (CR)	ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの。
			絶滅危惧 I B 類 (EN)	I A 類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの。
絶滅危惧 II 類 Vulnerable (VU)	絶滅の危険が増大している種。 現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、近い将来「絶滅危惧 I 類」のランクに移行することが確実と考えられるもの。	次のいずれかに該当する種 【確実な情報があるもの】 1 大部分の個体群で個体数が大幅に減少している。 2 大部分の生息地で生息条件が明らかに悪化しつつある。 3 大部分の個体群がその再生産能力を上回る捕獲圧にさらされている。 4 分布域の相当部分に交雑可能な別種が侵入している。		
準絶滅危惧 Near Threatened (NT)	存続基盤が脆弱な種。 現時点での絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」として上位ランクに移行する要素を有するもの。	次に該当する種。 生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。具体的には、分布域の一部において、次のいずれかの傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。 1 個体数が減少している。 2 生息条件が悪化している。 3 過度の捕獲による圧迫を受けている。 4 交雑可能な別種が侵入している。		
情報不足 Data Deficient (DD)	評価するだけの情報が不足している種。	環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧のカテゴリーに移行し得る属性(具体的には、次のいずれかの要素)を有しているが、生息状況をはじめとして、ランクを判定するに足る情報が得られていない種。あるいは確認例が極めて少なく、希少であるか否かも不明な種。 1 どの生息地においても生息密度が低く希少である。 2 生息地が極限されている。 3 生物地理上、孤立した分布特性を有する(分布域がごく限られた固有種等)。 4 生活史の一部または全部で特殊な環境条件を必要としている。		
地域個体群 Threatened Local Population (LP)	その種の国内及び愛知県における生息状況に鑑み、岡崎市において特に保全のための配慮が必要と考えられる特徴的な個体群。			

表4 過去の生息種の要件

分類群	内容
哺乳類	縄文時代草創期以降の確認記録があるもの。一過性の種、移入種、後期更新世以前の化石種は除外。
鳥類	継続(経年的)確認記録がある種。迷行的に記録される種など一過性の種は除外。
爬虫類	標本等の確実な生息記録がある種。
両生類	標本等の確実な生息記録がある種。
魚類	標本等の確実な生息記録がある種。
昆虫類	標本等の確実な生息記録がある種。
クモ類	標本等の確実な生息記録がある種。
貝類	標本等の確実な生息記録がある種。

3. 調査結果

(1) 概要

① 植物

「レッドデータブックおかざき 2014」に掲載された植物の種数は、表 5 のとおり。

市内ですでに絶滅した種（絶滅・野生絶滅）は 36 種であった。絶滅のおそれのある種（絶滅危惧 I 類及び II 類）は 115 種であった。また、現時点での絶滅危険度は小さいものの、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」種に移行する要素を有する種（準絶滅危惧）は 70 種であった。

また、絶滅のおそれの程度を評価するに足る情報が不足している種（情報不足）は 10 種であった。

表 5 「レッドデータブックおかざき 2014」掲載種数【植物】

評価区分 対象	絶滅 (EX)	絶滅のおそれのある種				準絶滅 危惧 (NT)	情報 不足 (DD)	計
		絶滅 危惧 I A 類 (CR)	絶滅 危惧 I B 類 (EN)	絶滅 危惧 II 類 (VU)	小計			
維管束植物	36	10	24	81	115	70	10	231

② 動物

「レッドデータブックおかざき 2014」に掲載された動物の種数は、表 6 のとおり。

市内ですでに絶滅した種（絶滅・野生絶滅）は 12 種であり、その内訳は、哺乳類が 3 種、魚類が 2 種及び昆虫類が 7 種であった。絶滅のおそれのある種（絶滅危惧 I 類及び II 類）は 96 種であり、その内訳は、哺乳類が 7 種、鳥類が 23 種、両生類が 2 種、魚類が 3 種、昆虫類が 31 種、クモ類が 22 種及び貝類が 8 種であった。また、現時点での絶滅危険度は小さいものの、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」種に移行する要素を有する種（準絶滅危惧）は 94 種であり、その内訳は、哺乳類が 2 種、鳥類が 17 種、両生類が 5 種、魚類が 6 種、昆虫類が 54 種、クモ類が 4 種及び貝類が 6 種であった。

また、絶滅のおそれの程度を評価するに足る情報が不足している種（情報不足）は 18 種であり、その内訳は、哺乳類が 2 種、鳥類が 2 種、爬虫類が 2 種、両生類が 1 種、魚類が 3 種、昆虫類が 5 種、クモ類が 1 種及び貝類が 2 種であった。

なお、国内及び愛知県における生息状況から、本市において保全のための配慮が必要と考えられる特徴的な個体群（地域個体群）は、鳥類で 2 個体群であった。

表 6 「レッドデータブックおかざき 2014」掲載種数【動物】

評価区分 対象	絶滅 (EX)	絶滅のおそれのある種				準絶滅 危惧 (NT)	情報 不足 (DD)	計	地域 個体群 (LP)
		絶滅 危惧 I A 類 (CR)	絶滅 危惧 I B 類 (EN)	絶滅 危惧 II 類 (VU)	小計				
哺乳類	3	2	3	2	7	2	2	14	0
鳥類	0	4	7	12	23	17	2	42	2
爬虫類	0	0	0	0	0	0	2	2	0
両生類	0	0	0	2	2	5	1	8	0
魚類	2	0	2	1	3	6	3	14	0
昆虫類	7	4	5	22	31	54	5	97	0
クモ類	0	3	5	14	22	4	1	27	0
貝類(小計)	0	4	0	4	8	6	2	16	0
陸産	0	1	0	3	4	3	2	9	0
淡水産	0	3	0	1	4	3	0	7	0
計	12	17	22	57	96	94	18	220	2

(2) 維管束植物

① 岡崎市における維管束植物の概況

岡崎市の地質は主に花崗岩と領家変成岩とからなる。花崗岩にはシイ・カシ・タブなどの広葉樹林が繁茂していたが、生活のために伐採されると、マツ・コナラ林へと変化した。しかし、近年はマツ・コナラが病害虫のために枯れ、ソヨゴ・ツバキなどの中低木になりつつある。また、この花崗岩が風化して、谷などに流れ込んで湿地を形成することも多くあり、岡崎市としては貴重な植物が多く見られた。しかし、風化した花崗岩は造成がしやすいということで、住宅地になってしまった。そのために失われてしまった植物も多くある。

一方、領家変成岩地帯はもともとが砂や泥の堆積物であり、それが熱や力によって変成されているので、風化が進みやすく、岩山というよりは、石と砂が適度にまじりあった富栄養な土壌であるため、植物の生育は旺盛である。しかし、明治期になると、積極的に植林を進め、造林事業の先駆地区として有名になった。特に、旧額田町域では全域で植林が進み、スギ・ヒノキ林へと変わってしまった。現在かろうじて昔のおもかげを残すのは闇苧溪谷沿いであるが、そこにもスギ・ヒノキの生育に支障があるということで川岸の植物が伐採されている。かつてはカエデ類やサクラの大木が占優していたところである。

また、花崗岩や領家変成岩の土砂が堆積されてできた河川敷や、矢作川・男川・乙川の流域に形成された土壌に生育する植物も大きく変わった。これらの土地の利用は早くから行われ、人間と自然とが共生してきたところである。そのために多様な環境が形成され、いろいろな植物が豊かに育っていた。しかし、農薬の利用などにより植物相は貧相なものになってしまった。また、豊かな植物相を有していた河川敷も今では大型機械によって定期的に刈り込みがなされ、チガヤなど限られた植物のみが育つ、単調な場所となっている。

② 岡崎市における絶滅危惧種の概況

今回、岡崎市版レッドリストでは、絶滅種 (EX) 36 種、絶滅危惧 I A 類 (CR) 10 種、絶滅危惧 I B 類 (EN) 24 種、絶滅危惧 II 類 (VU) 81 種、準絶滅危惧種 (NT) 70 種および情報不足 (DD) 10 種の計 231 種が掲載された。

今回レッドリストを作成するにあたり、過去の記録や現地調査結果に基づき該当すると思われる植物の 1 次的なリストを作成した後、ランクの判定を行った。過去の記録として、旧岡崎市域の植物については 2 回にわたり岡崎市史にまとめられているが、旧額田町域は額田町史のみであり、補助的に大原準之助氏の「愛知県国有林の植物誌」(大原準之助, 1971) と「宮崎村誌」(宮崎村誌編集委員会, 1960) を活用した。レッドリストの作成にあたり、一番難しかったのは各カテゴリー区分の境界線上にある種の判定であったが、いつも原点である評価区分基準にかえて整理した。

絶滅 (EX) の植物は旧岡崎市域のものが多くなったが、植物の生育環境が激変したところであり、やむをえなかった。旧額田町域では前々からよく知られていたウラボシノコギリシダが絶滅 (EX) として掲載されている。絶滅危惧 I A 類 (CR) には、個体数が極めて少ないもの、採集圧が高いもの、病気の発生により瀕死の状態にあるものなどが含まれている。絶滅危惧 I B 類 (EN) には、本市ではまだまだ目にすることができるが、全国、県内では減少し、絶滅の恐れがあるものを含む。絶滅危惧 II 類 (VU) には、近隣の資料を参考に本市としても今後急激な減少傾向に拍車がかかるであろうものを掲げた。準絶滅危惧 (NT) には、秋の七草など関心の深い植物や、地区や地域で大切に保護活動がなされている種もリストアップしている。

○ 岡崎市を分布限界（東限・南限）とする植物

今回リストアップされた植物の中には、岡崎市を分布の南限としたり東限とする植物が含まれている。一般的な分布域より隔離されているものもあり、その生育について説明するのは困難を極めるが、特筆すべき事項であり、ここにまとめて取り上げ、今後の検討を待ちたい。

・ シリブカガシ（東限の植物）（市 VU・県 VU）

細光町に自生状態の群落があり、東限となるが、当地では誤認され、これを「イチイガシ」として飢きん時の非常食にあてていた。本来のイチイガシは近くの石原町の神社に大木があり、毎年大量の実をつけている。

・ シロバイ（東限の植物）（市 EN・県 EN）

桜井寺町（旧額田町域）の桜井寺北斜面の谷筋に、ツブラジイの樹下になっているが、径 10cm 程のものから 1cm くらいのもので、大小含めて数十本生育している。本来の自生地より数十 km も離れているが実生と思われ幼木もあり、自生地であると判断した。これも東限の植物である。

・ サイカチ（南限の植物）（市 VU・県 VU）

「分布域について確実な自生は豊田市稲武と旭町だけで、そのほかは野生化したものであろう」とは小林元男氏「愛知県樹木誌」（小林, 2012）の中の一説である。今回岡崎市生平町で見つかったサイカチは川岸に生育しているため、根が何回も洗われ、濁流に耐えてきたことがよくわかる。胸高直径は 1m 近くあり、樹齡がどの程度なのか判断しかねる大木である。上流の寺院、川岸にもサイカチはみられない。どういう変遷を経て、ここにサイカチが生育することになったかは分からないが、きわめて自生に近い。また、サイカチの下流域には、かつてキバナイカリソウやカタクリが自生していた記録があり、あわせて考えるのがよいかもしれない。愛知県では南限の植物である。

・ ミヤマイボタ（南限の植物）（市 NT）

本宮山の闇菟溪谷添いに生育しているが、シカによる植害が甚だしく、淵などによりシカが侵入できないところにだけ自生している。更に本宮山で個体数が減っている原因として、スギ・ヒノキを守るための沢沿いの間伐も見逃せない。愛知県では本宮山が南限の植物である。

・ ユクノキ（南限の植物）（市 NT）

奥三河に生育する落葉樹ユクノキは、2~3 年に一度、6 月に長さ 15~30cm の円錐状の花序を枝先に出し、白色の蝶形花をつける。愛知県の南限は、闇菟溪谷である。

・ オオバアサガラ（南限の植物）（市 NT）

奥三河に生育する落葉樹オオバアサガラは、闇菟溪谷にも生育し、6 月に下垂した長い円錐花序の片側に白い花を多数つける。愛知県の南限は、闇菟溪谷である。

○ 川沿いの植物

岡崎市は矢作川と男川・乙川の二大河川が市内の中心部に向かって流れ込んでいる。矢作川は長野県にその源を発している。乙川は切山町より始まり、本宮山から流れ出した男川と茅原沢町で合流し、その後矢作川へ流れ込む。矢作川は天井川であるために堤防が発達し、川の氾濫を防いでいる。矢作川ではオニグルミがみられ、暑さのため大木になる前に虫にやられて枯れてしまうが、適度に種子が供給されるためいつでも中低木の観察ができる。このように矢作川は上流より絶えず種々の植物が運びこまれ、時々植生の変化が見られる。その最たる例としては、タコノアシを挙げることができる。かつて一定期間タコノアシが矢作川に自生していた。しかし、その後しばらく姿を消してしまった。しかし、今回の調査では多数のタコノアシが生育していた。このように生滅

を繰り返しながら生育している植物がある。

今回の調査で困難を極めたのは男川・乙川の川沿いの植物であった。両岸は竹藪であり、所々に淵があり、崖がありで、川筋すべてを踏破することはできなかった。それよりもこれまでに比較的多くの植物が観察されているところへ足を運びがちであった。しかし、こういう人々が足を踏み入っていないところには、我々の先入観を打ち破るような植物が見つかることがある。その一つが前述のサイカチであった。「労多くして益なし」に終わらなかったことは幸いであった。

さて、川沿いの植物の危機は近年多発する集中豪雨である。乙川の川の岩にミヤマヨメナの一大群落があったが、今はスギの林床に残るのみである。また、男川ではダイヤモンドソウが岩の壁面にびっしりと生え、数え切れぬほどあった群落も数十株も残すのみになってしまった。最近では、秋が深まってからの台風の襲来もあって、結実する前に流されてしまうことも多い。

反対に、梅雨明け後の日照りによる夏場の水量不足も問題である。かつては、にわか雨もあれば夕立もあり、適度に水分を補給してくれたが、今日では8月の下旬までほとんど雨がなく、川沿いの植物が枯れてしまうことである。このように両極端な影響もあって植物が単調化してきている。このような夏場の少雨化傾向は深刻で、植物全体に悪影響が出ている。

○ 草地の植物

山すそに生育する「つる性」の植物や、低木の林床や草地に生育する植物の減少が急激に進んでしまった最大の原因は、草払機の性能が年々向上し、親指大の太さの木なら簡単に切れてしまうことにある。これまでの鎌による作業では手が出せなかった作業が容易になり、道沿いはもとより、少々奥まったところまで刈り払われているのが現状である。しかも地上すれすれのところで切り払われてしまうので、再生も遅く、回数を重ねるに従って姿を消してしまう。このような作業によって数を減らしてきた植物にキキョウやオミナエシ、ハンショウヅルなどがある。かつての手作業であれば、こういう植物を残しながら手仕事をしたのであるが、草払機が導入されてからは、一網打尽に刈り尽くしてしまうことになった。このように機械が導入されたところでは、どこでも同じような傾向にある。

・マツムシソウ（市 EN・県 NT）

以前、旧岡崎市域の岡崎市少年自然の家に見られたが、ウラジロなどの繁茂により絶え、現在は、旧額田町域の愛知県野外教育センター内の土手に生育するのみである。

・キキョウ（市 VU・県 NT・国 VU）

旧岡崎市域の丘陵地の一部と旧額田町域の外山町などの土手に生育する。

・カワラナデシコ（市 NT）

矢作川と青木川の堤防の一部に生育する。

○ 自生か逸出植物かのはざまで

今回の調査により、これまで市内で確認されたことのない植物がいくつか確認された。これらが以前よりここに自生していた植物であれば、これまでの報告を補完することになり、後世への大切な資料を提供することになる。しかし、これらの植物が人為的に移植されたり、播種されたものであったら、後世の研究者に混乱を生じさせるだけであり、この種の情報を流さないにこしたことはない。しかし、時には判断しかねる場合があるので、あえてここで触れておこうと思う。

・ミズアオイ（県 CR・国 NT）

「福岡町の水路で繁茂しすぎ、水の流れを妨げてしまうので除去しなくてはならない」という話があり、現地でも生育状況を確認した。するとミズアオイの他にガガブタ（県 NT・国 NT）があ

り、アサザ（県 EN・国 NT）の群落も見つかるなどして、胸をときめかせた。しかし、この水路は改修されていて、立派なコンクリート水路になっているので、誰かがここに持ち込んだものであろうと判断した。念のために、上下流を調べてみたが、これらの植物は見当たらなかった。

・コウホネ（県 EN）

秦梨町の池にコウホネが生育している。この池が作られてから百年前後というだけで、現在のところ正しい年数が分からない。この池にハスに混じってコウホネが生育している。「レッドデータブックあいち 2009 植物編」（愛知県環境調査センター，2009）では、「岡崎の小呂に自生地があったが、絶滅してしまった」という報告がある。そして、今回新たにここにコウホネが見つかり、その判断に困ってしまったが、池が誕生してから間もないこと、ここにハスが持ち込まれていることなどから、ハスがここに移植された時に一緒に入り込んだものと判断した。

・シラタマホシクサ（県 VU・国 VU）

今まで豊橋市と豊田市では自生地が確認されていたが、なぜか岡崎市では見つかっていなかった。もし、この地でシラタマホシクサが見つければ、これまでの点が線となり、この植物の説明がしやすくなるのである。そこで、この土地の所有者にこの土地の利用について確認をとったところ「この土地は、他の土地との交換で入手したものであり、前の土地の所有者についてはよく分からない」との話を得て、果たとして行き詰まってしまった。あとは現地の状態を観察して判断するしかない。この土地は隠し田のようなところであり、多くの人々が入り出すようなところではない。こういうところにも、戦争の前後の食糧難の時代には米を作ることが多かった。形状は田んぼのような形でないが比較的平坦な地であって、しかも沢水が流れ込む肥沃な土であり、活用されていたのではないと思われる。しかし、ここに生育する植物は、ムラサキミミカキグサ、ウメバチソウ、サワシロギク、ドクゼリをはじめとして、湿地に生育する植物が多く観察できる。こういう二つの面を持っているので、どちらを取るか判断が難しく、今回は情報不足（DD）にランクした。

・カキノハグサ

岡崎少年自然の家の山中に 2 株、カキノハグサが開花しているのを確認した。生育場所は岩がごろごろしていて、移植されたものとは思えないし、新城市（旧鳳来町）の自生地ときわめて生育環境が似ている。もしこれが自生のものであれば、愛知県では南限に相当する。しかし、今回の調査中に姿を消してしまったため、今回あえてリストに掲げなかった。

○ 調査を終えて

今回の調査報告はある期間内のものであって、しかも完璧なものではないので、「今後の参考資料の一助になれば」という思いが強い。というのも、調査の最終段階に入ってから追加や削除を余儀なくされたからである。旧額田町にもあったというミズニラなど、今も気になる植物が目の前に浮かんでくる。

現在都市化や温暖化傾向、そして耕作放棄地の増加などにより、植生の変化が日々進行し、単調化している。そのような中、幸いなことにこれまで記録されなかった植物が見つかることもあったが、圧倒的に姿を消してゆく植物の方が多かったという現実がある。この減少傾向が今後どこまで進むのか、多分我々の予想の域をはるかに超えるものになるであろう。

（①及び②執筆者 安達史幸・千賀敏之）

③ 岡崎市維管束植物レッドリスト

科の範囲、名称、配列は、主として「日本の野生植物」草本Ⅰ～Ⅲ，木本Ⅰ～Ⅱ，シダ（平凡社，1980～1992）に準拠した。科内の配列については、学名のアルファベット順とした。

絶滅(EX)

No.	和名	科名	学名	国ランク	県ランク
1	マツバラシ	マツバラシ	<i>Psilotum nudum</i> (L.) Beauv.	NT	VU
2	スギラン	ヒカゲノカズラ	<i>Lycopodium cryptomerinum</i> Maxim.	VU	VU
3	ヤチスギラン	ヒカゲノカズラ	<i>Lycopodium inundatum</i> L.		VU
4	ウラボシノコギリシダ	イワデンダ	<i>Athyrium sheareri</i> (Baker) Ching		
5	イワオモダカ	ウラボシ	<i>Pyrosia hastata</i> (Thunb.) Ching		VU
6	サンショウモ	サンショウモ	<i>Salvinia natans</i> (L.) All.	VU	EN
7	アカウキクサ	アカウキクサ	<i>Azolla imbricata</i> (Roxb. ex Griff.) Nakai	EN	CR
8	オオアカウキクサ	アカウキクサ	<i>Azolla japonica</i> Franch. et Sav.	EN	EN
9	シデコブシ	モクレン	<i>Magnolia tomentosa</i> Thunb.	NT	VU
10	キバナイカリソウ	メギ	<i>Epimedium koreanum</i> Nakai		
11	コウホネ	スイレン	<i>Nuphar japonicum</i> DC.		EN
12	ヒツジグサ	スイレン	<i>Nymphaea tetragona</i> Georgi		
13	イシモチソウ	モウセンゴケ	<i>Drosera peltata</i> Smith var. <i>nipponica</i> (Masamune) Ohwi	NT	VU
14	シバハギ	マメ	<i>Desmodium heterocarpon</i> (L.) DC.		EN
15	ガガブタ	ミツガシワ	<i>Nymphoides indica</i> (L.) O.Kuntze	NT	NT
16	アサザ	ミツガシワ	<i>Nymphoides peltata</i> (Gmel.) O.Kuntze	NT	EN
17	ミカエリソウ	シソ	<i>Leucosceptrum stellipilum</i> (Miq.) Kitam. et. Murata		
18	ミカワシオガマ	ゴマノハグサ	<i>Pedicularis resupinata</i> L. var. <i>microphylla</i> Honda	VU	EN
19	ノタヌキモ	タヌキモ	<i>Utricularia aurea</i> Lour.	VU	VU
20	フサタヌキモ	タヌキモ	<i>Utricularia dimorphantha</i> Makino	EN	EX
21	ミカワタヌキモ(イトタヌキモ)	タヌキモ	<i>Utricularia exoleta</i> R.Br.	VU	EN
22	コタヌキモ	タヌキモ	<i>Utricularia intermedia</i> Heyne		EX
23	トチカガミ	トチカガミ	<i>Hydrocharis dubia</i> (Blume) Backer	NT	EN
24	セキショウモ	トチカガミ	<i>Vallisneria asiatica</i> Miki		
25	コウガイモ	トチカガミ	<i>Vallisneria denseserrulata</i> (Makino) Makino		VU
26	ヒルムシロ	ヒルムシロ	<i>Potamogeton distinctus</i> A.Bennett		NT
27	センニンモ	ヒルムシロ	<i>Potamogeton maackianus</i> A.Benn.		EX
28	カタクリ	ユリ	<i>Erythronium japonicum</i> Decne.		
29	イワショウブ	ユリ	<i>Tofieldia japonica</i> Miq.		NT
30	ヒメミクリ	ミクリ	<i>Sparganium stenophyllum</i> Maxim.	VU	CR
31	カガシラ	カヤツリグサ	<i>Scleria caricina</i> (R.Br.) Benth.	VU	CR
32	ミカワシンジュガヤ	カヤツリグサ	<i>Scleria mikawana</i> Makino	VU	VU
33	マメツタラン	ラン	<i>Bulbophyllum drymoglossum</i> Maxim.	NT	国リスト
34	マヤラン	ラン	<i>Cymbidium nipponicum</i> (Franch. et Sav.) Makino	VU	CR
35	オオミズトンボ(サワトンボ)	ラン	<i>Habenaria linearifolia</i> Maxim.	EN	EX
36	ニラバラシ	ラン	<i>Microtis unifolia</i> (Forst.) Reichb.f.		VU

絶滅危惧 I A類(CR)

No.	和名	科名	学名	国ランク	県ランク
37	タキミシダ	シシラン	<i>Antrophyum obovatum</i> Baker	EN	EN
38	アオネカズラ	ウラボシ	<i>Polypodium nipponicum</i> Mett.		
39	オオクボシダ	ヒメウラボシ	<i>Xiphopteris okuboii</i> (Yatabe) Copel.		NT
40	マンサク	マンサク	<i>Hamamelis japonica</i> Sieb. et Zucc.		
41	バアソブ	キキヨウ	<i>Codonopsis ussuriensis</i> (Rupr. et Maxim.) Hemsl.	VU	CR
42	スブタ	トチカガミ	<i>Blyxa echinosperma</i> (Clarke) Hook.f.	VU	VU
43	キスゲ	ユリ	<i>Hemerocallis citrina</i> Baroni. var. <i>vespertina</i> (Hara) M.Hotta		
44	ケシンジュガヤ	カヤツリグサ	<i>Scleria rugosa</i> R.Br.		
45	カンラン	ラン	<i>Cymbidium kanran</i> Makino	EN	EX
46	サワラン	ラン	<i>Eleorchis japonica</i> (A.Gray) F.Maekawa		CR

絶滅危惧 I B類(EN)

No.	和名	科名	学名	国ランク	県ランク
47	ミドリカナワラビ	オシダ	<i>Arachniodes nipponica</i> (Rosenst.) Ohwi		
48	ヒメカナワラビ(キヨスミシダ)	オシダ	<i>Polystichum tsus-simense</i> (Hook.) J.Sm.		
49	クリハラン	ウラボシ	<i>Neocheiropteris ensata</i> (Thunb.) Ching		
50	デンジソウ	デンジソウ	<i>Marsilea quadrifolia</i> L.	VU	EN
51	カザグルマ	キンボウゲ	<i>Clematis patens</i> Morr. et Decne.	NT	VU
52	タコノアシ	ユキノシタ	<i>Penthorum chinense</i> Pursh	NT	NT
53	ナメラダイモンジソウ	ユキノシタ	<i>Saxifraga fortunei</i> Hook.f. var. <i>suwoensis</i> Nakai		NT
54	ミヤマカタバミ	カタバミ	<i>Oxalis griffithii</i> Edgew. et Hook.f.		NT
55	ミヤマハハソ	アワブキ	<i>Meliosma tenuis</i> Maxim.		
56	ナナミノキ	モチノキ	<i>Ilex chinensis</i> Sims.		VU

57	ハナビゼリ	セリ	<i>Angelica inaequalis</i> Maxim.		
58	ギンリョウソウモドキ (アキノギンリョウソウ)	イチヤクソウ	<i>Monotropa uniflora</i> L.		
59	シロバイ	ハイノキ	<i>Symplocos lancifolia</i> Sieb. et Zucc.		EN
60	ミズトラノオ	シソ	<i>Eusteralia yatabeana</i> (Makino) Murata	VU	VU
61	マネキグサ	シソ	<i>Lamium ambiguum</i> (Makino) Ohwi	NT	国リスト
62	オオアブノメ	ゴマノハグサ	<i>Gratiola japonica</i> Miq.	VU	NT
63	マツムシソウ	マツムシソウ	<i>Scabiosa japonica</i> Miq.		NT
64	イズハハコ	キク	<i>Conyza japonica</i> (Thunb.) Less.	VU	NT
65	ウンズケ	イネ	<i>Eularia speciosa</i> (Debeaux) O.Kuntze	VU	NT
66	ギンラン	ラン	<i>Cephalanthera erecta</i> (Thunb.) Blume		
67	セッコク	ラン	<i>Dendrobium moniliforme</i> (L.) Sw.		NT
68	アオフタバラン	ラン	<i>Listera makinoana</i> Ohwi		
69	フウラン	ラン	<i>Neofinetia falcata</i> (Thunb.) Hu	VU	EN
70	トキソウ	ラン	<i>Pogonia japonica</i> Reichb.f.	NT	EN

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

No.	和名	科名	学名	国ランク	県ランク
71	マンネンスギ	ヒカゲノカズラ	<i>Lycopodium obscurum</i> L.		
72	クジャクシダ	ホウライシダ	<i>Adiantum pedatum</i> L.		
73	マツザカシダ	イノモトソウ	<i>Pteris nipponica</i> Shieh.		
74	クルマシダ	チャセンシダ	<i>Asplenium wrightii</i> Eaton ex Hook.		
75	スカイタチシダ	オシダ	<i>Dryopteris gymnosora</i> (Makino) C.Chr.		NT
76	チャボイノデ	オシダ	<i>Polystichum igaense</i> Tagawa		
77	オオヒメワラビ	イワデンダ	<i>Deparia okuboana</i> (Makino) M.Kato		
78	シロヤマシダ	イワデンダ	<i>Diplazium hachijoense</i> Nakai		
79	フクロシダ	イワデンダ	<i>Woodsia manchuriensis</i> Hook.		
80	イワヒトデ	ウラボシ	<i>Colysis elliptica</i> (Thunb.) Ching		
81	ヤノネシダ	ウラボシ	<i>Neocheiropteris ensata</i> (Thunb.) Ching		
82	ミズメ(ヨグソミネバリ、アズサ)	カバノキ	<i>Bethla grossa</i> Sieb. et Zucc.		
83	シリブカガシ	ブナ	<i>Lithocarpus glabra</i> (Thunb.) Nakai		VU
84	イラクサ	イラクサ	<i>Urtica thunbergiana</i> Sieb. et Zucc.		
85	ミヤマタニソバ	タデ	<i>Persicaria debilis</i> (Meisn.) H.Gross		
86	トヨボタニソバ	タデ	<i>Persicaria</i> sp.		NT
87	サトヤマタデ(ヒメボントクタデ)	タデ	<i>Persicaria</i> sp.		NT
88	マルミノヤマゴボウ	ヤマゴボウ	<i>Phytolacca japonica</i> Makino		
89	ニリンソウ	キンボウゲ	<i>Anemone flaccida</i> Fr. Schm.		
90	トリガタハンショウヅル	キンボウゲ	<i>Clematis tosaensis</i> Makino		
91	ヘビノボラズ	メギ	<i>Berberis sieboldii</i> Miq.		NT
92	マツモ	マツモ	<i>Ceratophyllum demersum</i> L.		
93	トモエソウ	オトギリソウ	<i>Hypericum ascyron</i> L.		
94	サワオトギリ	オトギリソウ	<i>Hypericum pseudopetiolatum</i> R.Keller		
95	ミズオトギリ	オトギリソウ	<i>Triadenum japonicum</i> Makino		
96	フウロケマン	ケシ	<i>Corydalis pallida</i> (Thunb.) Peris.		
97	ヒロハコンロンソウ	アブラナ	<i>Cardamine appendiculata</i> Franch. et Sav.		
98	ミズタガラシ	アブラナ	<i>Cardamine lyrata</i> Bunge		NT
99	ユリワサビ	アブラナ	<i>Wasabia tenuis</i> (Miq.) Matsum.		
100	ウメバチソウ	ユキノシタ	<i>Parnassia palustris</i> L. var. <i>multisetata</i> Ledeb		
101	オオウラジロノキ	バラ	<i>Malus tschonoskii</i> (Maxim.) C.K.Schn.		
102	トトミナシ	バラ	<i>Pyrus mikawana</i> Koidzumi		
103	サイカチ	マメ	<i>Gleditsia japonica</i> Miq.		VU
104	コショウノキ	ジンチョウゲ	<i>Daphne kiusiana</i> Miq.		
105	ヒナノカンザシ	ヒメハギ	<i>Salomonina oblongifolia</i> DC.		
106	ドクゼリ	セリ	<i>Cicuta virosa</i> L.		
107	ハナウド	セリ	<i>Heracleum moellendorffii</i> Hance		NT
108	ベニドウダン	ツツジ	<i>Enkianthus cernuus</i> (Sieb. et Zucc.) Makino f. <i>rubens</i> (Maxim.) Ohwi		
109	カイナンサラサドウダン	ツツジ	<i>Enkianthus sikokianus</i> (Palibin) Ohwi		
110	リンドウ (品種ホツバリンドウを含む)	リンドウ	<i>Gentiana scabra</i> Bunge var. <i>buengeri</i> (Miq.) Maxim.		
111	フデリンドウ	リンドウ	<i>Gentiana zollingeri</i> Fawc.		
112	イヌセンブリ	リンドウ	<i>Swertia diluta</i> (Turcz.) Benth. et Hook.f. var. <i>tosaensis</i> (Makino) Hara	VU	NT
113	カギカズラ	アカネ	<i>Uncaria rkyinchophylla</i> (Miq.) Miq.		
114	オオルリソウ	ムラサキ	<i>Cynoglossum zeylanicum</i> (Vahl) Thunb.		
115	ヤマドリソウ	ムラサキ	<i>Omphalodes japonica</i> (Thunb.) Maxim.		
116	テンニンソウ	シソ	<i>Leucosceptrum japonicum</i> (Miq.) Kitam. et Murata		
117	セキヤノアキチヨウジ	シソ	<i>Rabdosia effusa</i> (Maxim.) Hara		
118	オオヒナノウスツボ	ゴマノハグサ	<i>Scrophularia kakudensis</i> Franch.		
119	オオヒキヨモギ	ゴマノハグサ	<i>Siphonostegia laeta</i> S.Moore	VU	国リスト
120	ハグロソウ	キツネノマゴ	<i>Peristrophe japonica</i> (Thunb.) Bremek.		
121	ムラサキミミカキグサ	タヌキモ	<i>Utricularia uliginosa</i> Vahl	NT	NT

122	キキョウ	キキョウ	<i>Platycodon grandiflorum</i> (Jacq.) A.DC.	VU	NT
123	エンシュウハグマ	キク	<i>Ainsliaea dissecta</i> Franch. et Sav.		
124	ヒメガンクビソウ	キク	<i>Carpesium rosulatum</i> Miq.		
125	ミズギク	キク	<i>Inula ciliaris</i> (Miq.) Maxim.		NT
126	カシワバハグマ	キク	<i>Pertya robusta</i> (Maxim.) Beauv.		
127	サワギク	キク	<i>Senecio nikoensis</i> Miq.		
128	サワオグルマ	キク	<i>Senecio pierotii</i> Miq.		
129	イトモ	ヒルムシロ	<i>Potamogeton pusillus</i> L.	NT	NT
130	アマナ	ユリ	<i>Amana edulis</i> (Miq.) Honda		
131	シライトソウ	ユリ	<i>Chionographis japonica</i> Maxim.		
132	ノカンゾウ	ユリ	<i>Hemerocallis fulva</i> L. var. <i>longituba</i> (Miq.) Maxim.		
133	コオニユリ	ユリ	<i>Lilium leichtlinii</i> Hook.f. var. <i>maximowiczii</i> (Regel) Baker		
134	オオナルコユリ	ユリ	<i>Polygonatum macranthum</i> (Maxim.) Koidz.		
135	ノハナショウブ	アヤメ	<i>Iris ensata</i> Thunb. var. <i>spontanea</i> (Makino) Nakai		
136	ヒナノシヤクジョウ	ヒナノシヤクジョウ	<i>Burmannia championii</i> Thwait.		VU
137	ヒナザサ	イネ	<i>Coelachne japonica</i> Hack.	NT	VU
138	ウラハグサ	イネ	<i>Hakonechloa macra</i> (Munro) Makino ex Honda		
139	ムロウマムシグサ	サトイモ	<i>Arisaema kishidae</i> Makino ex Nakai		VU
140	マシカクイ	カヤツリグサ	<i>Eleocharis tetraquetra</i> Nees		VU
141	エビネ	ラン	<i>Calanthe discolor</i> Lindl.	NT	NT
142	キンラン	ラン	<i>Cephalanthera falcata</i> (Thunb.) Blume	VU	NT
143	カキラン	ラン	<i>Epipactis thunbergii</i> A.Gray		
144	ツチアケビ	ラン	<i>Galeola septentrionalis</i> Reichb.f.		
145	アキザキヤツシロラン	ラン	<i>Gastrodia verrucosa</i> Blume		VU
146	サギソウ	ラン	<i>Habenaria radiata</i> (Thunb.) Spreng.	NT	VU
147	ムヨウラン	ラン	<i>Lecanorchis japonica</i> Blume		
148	ヨウラクラン	ラン	<i>Oberonia japonica</i> (Maxim.) Makino		
149	コバノトンボソウ	ラン	<i>Platanthera nipponica</i> Makino		
150	ナガバノキノチドリ	ラン	<i>Platanthera ophrydioides</i> Fr.Schm. var. <i>australis</i> Ohwi		
151	カヤラン	ラン	<i>Sarcochilus japonicus</i> (Reichb.f.) Miq.		

準絶滅危惧(NT)

No.	和名	科名	学名	国ランク	県ランク
152	ヤマドリゼンマイ	ゼンマイ	<i>Osmunda cinnamomea</i> L.		
153	アマクサシダ	イノモトソウ	<i>Pteris dispar</i> Kunze		
154	ヌリトラノオ	チャセンシダ	<i>Asplenium normale</i> D.Don		
155	チャセンシダ	チャセンシダ	<i>Asplenium trichomanes</i> L.		
156	コモチシダ	シシガシラ	<i>Woodwardia orientalis</i> Sw.		
157	タニヘゴ	オシダ	<i>Dryopteris tokyoensis</i> (Matsu. ex Makino) C.Chr.		
158	サクラバハノキ	カバノキ	<i>Alnus trabeculosa</i> Hand.-Mazz.	NT	国リスト
159	イヌブナ	ブナ	<i>Fagus japonica</i> Maxim.		
160	コミゾバ	タデ	<i>Persicaria mikawana</i> Hanai et Seriz.		NT
161	カワラナデシコ	ナデシコ	<i>Dianthus superbus</i> L. var. <i>longicalycinus</i> (Maxim.) Williams		
162	タムシバ	モクレン	<i>Magnolia salicifolia</i> (Sieb. et Zucc.) Maxim.		
163	ヤマグルマ	ヤマグルマ	<i>Trochodendron aralioides</i> Sieb. et Zucc.		
164	ハンショウヅル	キンボウゲ	<i>Clematis japonica</i> Thunb.		
165	イヌショウマ	キンボウゲ	<i>Gimisifuga japonica</i> (Thunb.) Sprengel		
166	ヒメシヤラ (品種トチュウヒメシヤラを含む)	ツバキ	<i>Stewartia monadelphica</i> Sieb. et Zucc.		
167	ジュンサイ	スイレン	<i>Brasenia schreberi</i> J.F.Gmel.		
168	モウセンゴケ	モウセンゴケ	<i>Drosera rotundifolia</i> L.		
169	トリアシショウマ	ユキノシタ	<i>Astilbe thunbergii</i> (Sieb. et Zucc.) Miq. var. <i>congesta</i> H.Boiss.		
170	トウノウネコノメ	ユキノシタ	<i>Chrysosplenium pseudopilosum</i> Wakab. et Hr.Takah.		
171	ダイモンジソウ	ユキノシタ	<i>Saxifraga fortunei</i> Hook.f. var. <i>incisolobata</i> (Engl. et Irmsch.) Nakai		
172	ウチワダイモンジソウ	ユキノシタ	<i>Saxifraga fortunei</i> Hook.f. var. <i>obtusocuneata</i> (Makino) Nakai		
173	ユクノキ(ミヤマフジキ)	マメ	<i>Cladrastis sikokiana</i> (Makino) Makino		
174	キハダ	ミカン	<i>Phellodendron amurense</i> Ruper.		
175	ウリノキ	ウリノキ	<i>Alangium platanifolium</i> (Sieb. et Zucc.) Harms var. <i>trilobum</i> (Miq.) Ohwi		
176	ヤマボウシ	ミズキ	<i>Benthamidia japonica</i> (Sieb. et Zucc.) Hara		
177	ナガバナタチツボスミレ	スミレ	<i>Viola ovato-oblonga</i> (Miq.) Makino		
178	ウスゲチョウジタデ	アカバナ	<i>Ludwigia greatrexi</i> H.Hara	NT	国リスト
179	ミズユキノシタ	アカバナ	<i>Ludwigia ovalis</i> Miq.		
180	シラネセンキュウ(スズカゼリ)	セリ	<i>Angelica polymorpha</i> Maxim.		
181	ナンカイイワカガミ	イワウメ	<i>Schizocodon ilicifolius</i> Maxim. var. <i>nankaiensis</i> Yamazaki		
182	ギンリョウソウ	イチヤクソウ	<i>Monotropastrum humile</i> (D.Don) Hara		
183	イチヤクソウ	イチヤクソウ	<i>Pyrola japonica</i> Klenze		
184	コアブラツツジ	ツツジ	<i>Enkianthus nudipes</i> (Honda) Ohwi		
185	ツリガネツツジ(ウスギョウラク)	ツツジ	<i>Menziesia cilicalyx</i> (Miq.) Maxim.		

186	レンゲツツジ	ツツジ	<i>Rhododendron japonicum</i> (A.Gray) Suringar		
187	ツルコウジ	ヤブコウジ	<i>Ardisia pusilla</i> DC.		
188	クサレダマ	サクラソウ	<i>Lysimachia vulgaris</i> L. var. <i>davurica</i> (Ledeb.) R.Kunth		
189	オオバアサガラ	エゴノキ	<i>Pterostyrax hispida</i> Sieb. et Zucc.		
190	クロミノニシゴリ	ハイノキ	<i>Symplocos paniculata</i> (Thunb.) Miq.		
191	ミヤマイボタ	モクセイ	<i>Liqustrum tschonoskii</i> Decne.		
192	ハルリンドウ	リンドウ	<i>Gentiana thunbergii</i> (G.Don) Griseb.		
193	ホソバノヨツバムグラ	アカネ	<i>Galium trifidum</i> L. var. <i>brevipedunculatum</i> Regel		
194	ルリミノキ	アカネ	<i>Lasianthus japonicus</i> Miq.		NT
195	オニルリソウ	ムラサキ	<i>Cynoglossum asperrimum</i> Nakai		
196	カリガネソウ	クマツヅラ	<i>Caryopteris divaricata</i> (Sieb. et Zucc.) Maxim.		
197	タチキランソウ	シソ	<i>Ajuga makinoi</i> Nakai	NT	国リスト
198	アキチョウジ	シソ	<i>Rabdosia longituba</i> (Miq.) Hara		
199	タカクマヒキオコシ	シソ	<i>Rabdosia shikokiana</i> (Makino) Hara var. <i>intermedia</i> (Kudo) Hara		
200	ママコナ	ゴマノハグサ	<i>Melampyrum roseum</i> Maxim. var. <i>japonicum</i> Franch. et Sav.		
201	ミゾホオズキ	ゴマノハグサ	<i>Mimulus nepalensis</i> Benth. var. <i>japonicus</i> Miq.		
202	イワタバコ	イワタバコ	<i>Conandron ramondioides</i> Sieb. et Zucc.		
203	イヌタヌキモ	タヌキモ	<i>Utricularia australis</i> R.Br.	NT	国リスト
204	ミミカキグサ	タヌキモ	<i>Utricularia bifida</i> L.		
205	ホザキノミミカキグサ	タヌキモ	<i>Utricularia racemosa</i> Wall.		
206	オオカメノキ(ムシカリ)	スイカズラ	<i>Viburnum furcatum</i> Blume ex Maxim.		
207	オミナエシ	オミナエシ	<i>Patrinia scabiosaefolia</i> Fisch.		
208	サワギキョウ	キキョウ	<i>Loberia sessilifolia</i> Lamb.		
209	オタカラコウ	キク	<i>Ligularia fischerii</i> (Ledeb.) Turcz.		
210	ヤマヨメナ(ノシュンギク)	キク	<i>Miyamayomena savatieri</i> (Makino) Kitam.		
211	アギナシ	オモダカ	<i>Sagittaria aginashi</i> (Makino) Makino	NT	国リスト
212	ミズオオバコ	トチカガミ	<i>Ottelia alismoides</i> (L.) Pers.	VU	国リスト
213	ホンゴウソウ	ホンゴウソウ	<i>Andruris japonica</i> (Makino) Giesen	VU	VU
214	ヤマラッキョウ	ユリ	<i>Allium thunbergii</i> G.Don		
215	ササユリ	ユリ	<i>Lilium japonicum</i> Thunb.		
216	ナベワリ	ビャクブ	<i>Croomia heterosepala</i> (Baker) Okuyama		
217	ヒメコヌカグサ	イネ	<i>Agrostis valvata</i> Steud.	NT	国リスト
218	ナガエミクリ	ミクリ	<i>Sparganium japonicum</i> Rothert	NT	国リスト
219	ムギラン	ラン	<i>Bulbophyllum inconspicuum</i> Maxim.	NT	国リスト
220	クロヤツシロラン	ラン	<i>Gastrodia pubilabiata</i> Sawa		
221	クモラン	ラン	<i>Taeniophyllum glandulosum</i> Blume		

情報不足(DD)

No.	和名	科名	学名	国ランク	県ランク
222	ヒメイカリソウ	メギ	<i>Epimedium × youngianum</i> Fisch. et Mey.		
223	シロネ	シソ	<i>Lycopus lucidus</i> Turcz.		NT
224	イトトリゲモ	イバラモ	<i>Najas japonica</i> Nakai	NT	国リスト
225	シラタマホシクサ	ホシクサ	<i>Eriocaulon nudicuspe</i> Maxim.	VU	VU
226	ウキシバ	イネ	<i>Pseudoraphis ukishiba</i> Ohwi		NT
227	サイハイラン	ラン	<i>Cremastra appendiculata</i> (D.Don) Makino		
228	シュスラン	ラン	<i>Goodyera velutina</i> Maxim.		VU
229	ミズトンボ	ラン	<i>Habenaria sagittifera</i> Reichb.f.	VU	VU
230	ヤマトキソウ	ラン	<i>Pogonia minor</i> (Makino) Makino		VU
231	トンボソウ	ラン	<i>Tulotis ussuriensis</i> (Regel) Hara		VU

(3) 哺乳類

① 岡崎市における哺乳類の概況

岡崎市は愛知県の中央部にあり、岡崎平野とその東にある三河山地の接点に位置している。矢作川が市内を北から南方向に流れ、乙川が東から西方向に流れ矢作川に合流している。旧岡崎市域が西方に位置し、旧額田町域が東方に位置するため、旧岡崎市域の大半は平野となり、旧額田町域が山地となる特徴がある。海域は存在しないため、岡崎市内に生息する現生哺乳類は飛翔性・滑空性・地中性・半水生を含む広い意味での陸生哺乳類に限られている。近隣で生息が確認されている種もふくめた一覧は次の通りである（*は近隣で確認されている種、§は外来種）。

- 齧歯目（ネズミ目） RODENTIA
 - ◆ネズミ科 MURIDAE
 - 1. ハタネズミ *Microtus montebelli* (Milne-Edwards, 1872)
 - 2. スミスネズミ *Myodes smithii* (Thomas, 1905)
 - 3. ヒメネズミ *Apodemus argenteus* (Temminck, 1844)
 - 4. アカネズミ *Apodemus speciosus* (Temminck, 1844)
 - 5. カヤネズミ *Micromys minutus* (Pallas, 1771)
 - 6. ハツカネズミ *Mus musculus* Linnaeus, 1758
 - 7. ドブネズミ *Rattus norvegicus* (Berkenhout, 1769)
 - 8. クマネズミ *Rattus rattus* (Linnaeus, 1758)
 - ◆ヌートリア科 MYOCASTORIDAE
 - 9. §ヌートリア *Myocastor coypus* (Molina, 1782)
 - ◆リス科 SCIURIDAE
 - 10. ニホンリス *Sciurus lis* Temminck, 1844
 - 11. ムササビ *Petaurista leucogenys* (Temminck, 1827)
 - 12. *モモンガ *Pteromys momonga* Temminck, 1844
 - ◆ヤマネ科 GLIRIDAE
 - 13. ヤマネ *Glirulus japonicus* (Schinz, 1845)
- ウサギ目 LAGOMORPHA
 - ◆ウサギ科 LEPORIDAE
 - 14. ノウサギ *Lepus brachyurus* Temminck, 1845
- 霊長目（サル目） PRIMATES
 - ◆オナガザル科 CERCOPITHECIDAE
 - 15. ニホンザル *Macaca fuscata* (Blyth, 1875)
- 偶蹄目（ウシ目） ARTIODACTYLA
 - ◆ウシ科 BOVIDAE
 - 16. カモシカ *Capricornis crispus* (Temminck, 1836)
 - ◆シカ科 CERVIDAE
 - 17. ニホンジカ *Cervus nippon* Temminck, 1838
 - ◆イノシシ科 SUIDAE
 - 18. イノシシ *Sus scrofa* Linnaeus, 1758
- 食肉目（ネコ目） CARNIVORA
 - ◆イタチ科 MUSTELIDAE
 - 19. †カワウソ *Lutra nippon* Imaizumi et Yoshiyuki, 1989
 - 20. テン *Martes melampus* (Wagner, 1840)
 - 21. アナグマ *Meles anakuma* Temminck, 1844
 - 22. ニホンイタチ *Mustela itatsi* Temminck, 1844
 - 23. *§シベリアイタチ *Mustela sibirica* Pallas, 1773
 - ◆アライグマ科 PROCYONIDAE
 - 24. §アライグマ *Procyon lotor* (Linnaeus, 1758)
 - ◆クマ科 URSIDAE
 - 25. ツキノワグマ *Ursus thibetanus* G. [Baron] Cuvier, 1823
 - ◆イヌ科 CANIDAE
 - 26. †オオカミ *Canis lupus* Linnaeus, 1758
 - 27. §ノイヌ *Canis lupus familiaris* Linnaeus, 1758
 - 28. タヌキ *Nyctereutes procyonoides* (Gray, 1834)
 - 29. キツネ *Vulpes vulpes* (Linnaeus, 1758)
 - ◆ネコ科 FELIDAE
 - 30. §ノネコ *Felis catus* Linnaeus, 1758
 - ◆ジャコウネコ科 VIVERRIDAE
 - 31. ハクビシン *Paguma larvata* (C.E.H. Smith, 1827)

- 翼手目（コウモリ目） CHIROPTERA
 - ◆キクガシラコウモリ科 RHINOLOPHIDAE
 - 32. *キクガシラコウモリ *Rhinolophus ferrumequinum* (Schreber, 1774)
 - ◆ヒナコウモリ科 VESPERTILIONIDAE
 - 33. アブラコウモリ *Pipistrellus abramus* (Temminck, 1838)
 - 34. *ヒナコウモリ *Vespertilio sinensis* (Peters, 1880)
 - 35. *モモジロコウモリ *Myotis macrodactylus* (Temminck, 1840)
- トガリ目（モグラ目） SORICOMORPHA
 - ◆モグラ科 TALPIDAE
 - 36. *アズマモグラ *Mogera imaizumii* (Kuroda, 1957)
 - 37. コウベモグラ *Mogera wogura* (Temminck, 1842)
 - 38. ヒミズ *Urotrichus talpoides* Temminck, 1841
 - ◆トガリ科 SORICIDAE
 - 39. ニホンジネズミ *Crocidura dsinezumi* (Temminck, 1842)
 - 40. カワネズミ *Chimarrogale platycephalus* (Temminck, 1842)

② 岡崎市における絶滅危惧種の概況

絶滅種 (EX) 3 種, 絶滅危惧 I A 類 (CR) 2 種, 絶滅危惧 I B 類 (EN) 3 種, 絶滅危惧 II 類 (VU) 2 種, 準絶滅危惧種 (NT) 2 種および情報不足 (DD) 2 種の計 14 種がリストに掲載された。

絶滅種として掲載されたのはすべて食肉目 (ネコ目) で、カワウソ (イタチ科)、ツキノワグマ (クマ科)、オオカミ (イヌ科) の 3 種である。カワウソは日本国内での絶滅が確認されており、岡崎市では 1920~1930 年頃に旧額田町域の宮崎で捕獲されたという記述が最後のものである (宮崎村史編集委員会, 1960)。ツキノワグマは岡崎市での近年の確実な生息記録はないが、市の南西に隣接する西尾市八王子貝塚 (縄文時代) の出土遺存体からかつての生息がしられ、また、2013 年 6 月には岡崎市との境界部である豊田市蘭町 (旧下山村) で確実な目撃例が得られていることなどから絶滅種として選定した。オオカミもカワウソ同様に日本における絶滅種であり、岡崎市近隣の縄文から弥生時代の出土例ならびに歴史時代の生息記録をその行動域の広さを考慮して絶滅種とした。

絶滅危惧 I A 類は齧歯目 (ネズミ目) のスミスネズミ (ネズミ科) とヤマネ (ヤマネ科) の 2 種である。スミスネズミは岡崎市の旧岡崎市域と旧額田町域で記録があるが、近年の生息記録がとぼしく、また捕獲調査でも標本が得られず、個体数の減少や個体群の分断が危惧されている。ヤマネは旧額田町域の南大須町と夏山町で生息記録があるが、個体群の孤立化と生活環境の悪化が危惧されている。

絶滅危惧 I B 類は齧歯目 (ネズミ目) ネズミ科のハタネズミとカヤネズミ、およびトガリ目 (モグラ目) のカワネズミ (トガリ科) の 3 種である。ハタネズミは旧額田町域での記載があるが、はっきりした分布記録が乏しい状態である。近隣では安城市での確かな記録があり (小鹿, 2005)、旧岡崎市域で記録のあるカヤネズミとともに絶滅危惧 I B 類に選定された。カワネズミは旧額田町域の宮崎 (旧宮崎村) で記録があるが、近年の岡崎市では記録に乏しく、河川環境に依存する本種の生息環境の悪化による生息数の減少が危惧されている。

絶滅危惧 II 類は齧歯目のニホンリス (リス科) とウサギ目のノウサギ (ウサギ科) の 2 種である。ニホンリスの岡崎市における分布は旧岡崎市域と旧額田町域の平野と山間部の森林である。目撃記録の減少から、生息数の減少が危惧されている。ノウサギは旧岡崎市域での写真撮影やロードキル個体の存在から、また旧額田町域では聞き込みからその生息が示されている。野外調査の際における生息痕や目撃例の減少から、生息数の減少が危惧されている。

準絶滅危惧種は齧歯目のムササビ (リス科) と食肉目のテン (イタチ科) の 2 種である。ムササビは旧額田町域で記録があるが、樹上性で杉を含む森林や社寺林に依存しており、生息地の改変による生息数の減少が危惧される。愛知県でも渥美半島では絶滅したと考えられる。テンは旧額田町

域の闇菟溪谷での記録があるが、県内でも知多半島、渥美半島および平野部の多くの地域で絶滅したと考えられ、エサ不足などによる個体数の減少や分布域の減少が危惧される。

情報不足とされたのは齧歯目（ネズミ目）のモモンガとトガリ目（モグラ目）のアズマモグラの2種である。モモンガは岡崎市では確実な分布情報は得られなかったものの、豊田市足助地域、設楽町の裏谷などでは確実な記録がある。夜行性であり、ムササビと誤認される可能性や現在の分布記録の不明瞭さから選定された。アズマモグラも確実な分布記録は得られなかったが、隣接する豊田市の旧豊田市域での分布や岡崎市に設置されたフクロウの巣箱からヤマネとともに発見された「モグラの一種」（真野・杉山, 2008）に本種が含まれている可能性などから情報不足に選定した。

【引用文献】

- ・真野 徹・杉山時雄, 2008. フクロウの巣箱から確認された動物の骨格. 西三河野鳥研究年報, 11: 1-6.
- ・宮崎村史編集委員会, 1960. 野生のけもの. 宮崎村史, pp.514-519. 宮崎村史編集委員会, 額田町.
- ・小鹿登美, 2005. 愛知県安城市哺乳類の記録. マンモス特別号, (7): 4-9.

(①及び②執筆者 子安和弘)

③ 岡崎市哺乳類レッドリスト

目及び科の範囲と種の配列は原則として“Bininda-Emonds, O.R.P. (2007) The delayed rise of present-day mammals, Nature 446: 507-512”及び“The Wild Mammals of Japan, SHOUKADOH, Kyoto” (Ohdachi et al, eds, 2009) に準拠し、新しい知見を加え整理した。

絶滅(EX)

No.	和名	目名	科名	学名	国ランク	県ランク
1	カワウソ	食肉(ネコ)	イタチ	<i>Lutra lutra</i> (Linnaeus)	EX	EX
2	ツキノワグマ	食肉(ネコ)	クマ	<i>Ursus thibetanus</i> G.[Baron] Cuvier	LP	CR
3	オオカミ	食肉(ネコ)	イヌ	<i>Canis lupus</i> Linnaeus	EX	EX

絶滅危惧 I A類(CR)

No.	和名	目名	科名	学名	国ランク	県ランク
4	スミスネズミ	齧歯(ネズミ)	ネズミ	<i>Myodes smithii</i> (Thomas)		NT
5	ヤマネ	齧歯(ネズミ)	ヤマネ	<i>Glirulus japonicus</i> (Schinz)		NT

絶滅危惧 I B類(EN)

No.	和名	目名	科名	学名	国ランク	県ランク
6	ハタネズミ	齧歯(ネズミ)	ネズミ	<i>Microtus montebelli</i> (Milne-Edwards)		NT
7	カヤネズミ	齧歯(ネズミ)	ネズミ	<i>Micromys minutus</i> (Pallas)		VU
8	カワネズミ	トガリ(モグラ)	トガリ	<i>Chimarrogale platycephalus</i> (Temminck)	LP	VU

絶滅危惧 II 類(VU)

No.	和名	目名	科名	学名	国ランク	県ランク
9	ニホンリス	齧歯(ネズミ)	リス	<i>Sciurus lis</i> Temminck	LP	
10	ノウサギ	ウサギ	ウサギ	<i>Lepus brachyurus</i> Temminck		

準絶滅危惧(NT)

No.	和名	目名	科名	学名	国ランク	県ランク
11	ムササビ	齧歯(ネズミ)	リス	<i>Petaurista leucogenys</i> (Temminck)		NT
12	テン	食肉(ネコ)	イタチ	<i>Martes melampus</i> (Wagner)		NT

情報不足(DD)

No.	和名	目名	科名	学名	国ランク	県ランク
13	モモンガ	齧歯(ネズミ)	リス	<i>Pteromys momonga</i> Temminck		EN
14	アズマモグラ	トガリ(モグラ)	モグラ	<i>Mogera imaizumii</i> (Kuroda)		VU

(4) 鳥 類

① 岡崎市における鳥類の概況

岡崎市は愛知県のほぼ中央部に位置し、西部に矢作川が流れ、その支流の青木川・乙川・男川など多数の河川がある。そして、最東端にある標高 789m の本宮山を最高峰とする山地から丘陵地に連なり、さらに市街地や農耕地が広がっている。

そのため、本市域の約 60%を占める森林や河川敷などの草地、農耕地など、生物多様性ある豊かな自然環境も残っており、鳥類の生息に適した環境も十分とは言えないながらも点在している。しかしながら、鳥類が生息できる環境は開発や河川・道路網の整備などにより狭められる傾向にある。

岡崎市鳥類記録(岡崎野鳥の会, 2010)によると、岡崎市で生息が確認された種は 17 目 53 科 238 種である。愛知県で確認された鳥類は、「レッドデータブックあいち 2009 動物編」(愛知県環境調査センター, 2009)に掲載された「愛知県鳥類目録 2008 目科別集計」によると、18 目 67 科 398 種であり、岡崎市の確認鳥類は目で 94%、科で 79%、種で 60%にあたる。

岡崎市は海域に面していないため、水鳥のカモ類やカモメ類・シギ類の生息場所は限られており、これらの確認種は多くないが、森林や草地・農耕地に生息するタカ類や小鳥など多種の野鳥が確認されている。内陸部に位置する本市ではあるが、愛知県全域からみても多様で豊かな鳥相を呈していると言える。前述の岡崎市鳥類記録及び愛知県鳥類目録は「日本鳥類目録 改定第 6 版」(日本鳥学会, 2000)に基づいた分類による。

2012 年に「日本鳥類目録 改定第 7 版」(日本鳥学会, 2012)が発行され新たな分類がなされた。2013 年には西三河野鳥の会によって「西三河鳥類目録」が発行され、岡崎市鳥類目録も見直され、確認種は 20 目 57 科 145 属 243 種となった。そのため、表 7 に「日本鳥類目録 改定第 7 版」に準じて分類された「岡崎市鳥類目録 2013 目科別集計表」を掲載する。

表 7 岡崎市鳥類目録 2013 目科別集計表

目	科	属数	種数	目	科	属数	種数
キジ目	キジ科	3	3	スズメ目	カササギヒタキ科	1	1
カモ目	カモ科	9	23		モズ科	1	3
カイツブリ目	カイツブリ科	2	3		カラス科	4	7
ハト目	ハト科	2	2		クイタダキ科	1	1
ミズナギドリ目	ウミツバメ科	1	1		ツリスガラ科	1	1
コウノトリ目	コウノトリ科	1	1		シジュウカラ科	3	4
カツオドリ目	ウ科	1	1		ヒバリ科	2	2
ペリカン目	サギ科	9	12		ツバメ科	3	4
ツル目	クイナ科	5	5		ヒヨドリ科	1	1
カッコウ目	カッコウ科	3	5		ウグイス科	2	2
ヨタカ目	ヨタカ科	1	1		エナガ科	1	1
アマツバメ目	アマツバメ科	2	3		ムシクイ科	1	4
チドリ目	チドリ科	3	7		メジロ科	1	1
	セイタカシギ科	1	1		センニュウ科	1	1
	シギ科	13	28		ヨシキリ科	2	2
	タマシギ科	1	1		セッカ科	1	1
	ツバメチドリ科	1	1		レンジャク科	1	2
	カモメ科	3	9		ゴジュウカラ科	1	1
タカ目	トウゾクカモメ科	1	1		キバシリ科	1	1
	ミサゴ科	1	1		ミソサザイ科	1	1
タカ科	タカ科	9	15	ムクドリ科	3	4	
				カワガラス科	1	1	
フクロウ目	フクロウ科	4	6	ヒタキ科	10	23	
サイチョウ目	ヤツガシラ科	1	1	イワヒバリ科	1	1	
ブッポウソウ目	カフセミ科	3	3	スズメ科	1	2	
	ブッポウソウ科	1	1	セキレイ科	2	5	
キツツキ目	キツツキ科	3	4	アトリ科	9	11	
ハヤブサ目	ハヤブサ科	1	4	ホオジロ科	1	10	
スズメ目	ヤイロチョウ科	1	1				
	サンショウクイ科	1	1	合 計	20 目 57 科 145 属 243 種		

② 岡崎市における絶滅危惧種の概況

この度、岡崎市で絶滅のおそれがあると認められた鳥類は、絶滅 (EX) は 0 種、絶滅危 I A 類 (CR) が 4 種、絶滅危惧 I B 類 (EN) が 7 種、絶滅危惧 II 類 (VU) が 12 種、準絶滅危惧 (NT) が 17 種、情報不足 (DD) が 2 種であり、合計 42 種である。これは表 7 の岡崎市鳥類記録に掲載された 243 種の 17.3% に相当し、多くの種が絶滅の危機に立たされていることとなる。また、特定の地域環境を利用して渡り行動をしており、市内において重要かつ特徴的な個体群を地域個体群 (LP) とし、2 種を加えた。

絶滅危惧種の選定と評価区分にあたっては、市内での確認種について、それぞれの種の生息時期や繁殖・通過・越冬などの生態をふまえ、経年的データや調査を実施し個体数の変化を勘案し総合的な判断をした。

「レッドデータブックあいち 2009 動物編」によると、愛知県における絶滅危惧種等の選定種は絶滅危惧 I A 類 (CR) 9 種、絶滅危惧 I B 類 (EN) 13 種、絶滅危惧 II 類 (VU) 26 種、準絶滅危惧 (NT) 31 種、情報不足 (DD) 1 種、地域個体群 (LP) 3 種、合計 83 種である。

その結果、岡崎市の選定種は県の選定種に対し、絶滅危惧 I A 類で 44%、絶滅危惧 I B 類で 54%、絶滅危惧 II 類で 46%、準絶滅危惧種で 55%、情報不足で 200%、地域個体群で 67% であり合計では 55% にあたる。

愛知県においてランクの高いヨシゴイ・クマタカ・ヤマセミ・ハヤブサ・ミゾゴイなどは、岡崎市においても生息個体数が少なく、さらに減少が心配される種であり絶滅危惧 I A、I B に選定した。また、愛知県ではリストに上がっていないが、市内の市街地周辺の公園の樹木に営巣するササゴイ、学校などの建造物に営巣するコシアカツバメ、乙川に架かる橋桁などで営巣するイワツバメは、県内においても稀な繁殖・生息であり、しかも、人の生活域に近いことは繁殖活動に影響を及ぼす可能性が高いためリストに入れた。

鳥類は春と秋に日本国内を移動するもの、日本と国外との渡りをするものがあるが、ハチクマとサシバは日本で繁殖し冬期は東南アジアへ渡り越冬する。伊良湖岬はその渡りの中継地として多数飛翔通過しており有名であるが、愛知県はサシバの渡り群 (地域個体群) としてリストアップしている。同様に桑谷山系はサシバとハチクマの県内有数の渡りコースであり、これらの渡り群を地域個体群 (LP) にリストアップした。

この度のリスト策定を通じて、市内においても従前から希少とされてきた種で、さらに減少したもの、従前は普通に生息していた種で、急速に減少傾向にある種などが判明したことは有意義であった。今後、このような減少傾向に歯止めがかかるよう、生息環境が保全され、また、回復されるような対策が講じられることが望まれる。

(①及び②執筆者 小嶋良武)

③ 岡崎市鳥類レッドリスト

目及び科の範囲、名称、配列は、「日本鳥類目録 改訂第 7 版」(日本鳥学会, 2012) に準拠した。

絶滅 (EX)

(該当種なし)

絶滅危惧 I A類(CR)

No.	和名	目名	科名	学名	国ランク	県ランク
1	ヨシゴイ	ペリカン	サギ	<i>Ixobrychus sinensis</i> (Gmelin)	NT	EN
2	クマタカ	タカ	タカ	<i>Nisaetus nipalensis</i> Hodgson	EN	EN
3	ヤマセミ	ブッポウソウ	カワセミ	<i>Megaceryle lugubris</i> (Temminck)		EN
4	ハヤブサ	ハヤブサ	ハヤブサ	<i>Falco peregrinus</i> Tunstall	VU	EN

絶滅危惧 I B類(EN)

No.	和名	目名	科名	学名	国ランク	県ランク
5	ミゾゴイ	ペリカン	サギ	<i>Gorsachius goisagi</i> (Temminck)	VU	EN
6	ヒクイナ	ツル	クイナ	<i>Porzana fusca</i> (Linnaeus)	NT	VU
7	ヨタカ	ヨタカ	ヨタカ	<i>Caprimulgus indicus</i> Latham	NT	VU
8	タマンギ	チドリ	タマンギ	<i>Rostratula benghalensis</i> (Linnaeus)	VU	VU
9	サシバ	タカ	タカ	<i>Butastur indicus</i> (Gmelin)	VU	VU
10	アオバズク	フクロウ	フクロウ	<i>Ninox scutulata</i> (Raffles)		NT
11	カワガラス	スズメ	カワガラス	<i>Cinclus pallasii</i> Temminck		VU

絶滅危惧 II類(VU)

No.	和名	目名	科名	学名	国ランク	県ランク
12	トモエガモ	カモ	カモ	<i>Anas formosa</i> Georgi	VU	VU
13	クイナ	ツル	クイナ	<i>Rallus aquaticus</i> Linnaeus		NT
14	バン	ツル	クイナ	<i>Gallinula chloropus</i> (Linnaeus)		
15	イカルチドリ	チドリ	チドリ	<i>Charadrius placidus</i> Gray et Gray		VU
16	シロチドリ	チドリ	チドリ	<i>Charadrius alexandrinus</i> Linnaeus	VU	NT
17	アオシギ	チドリ	シギ	<i>Gallinago solitaria</i> Hodgson		NT
18	コアジサシ	チドリ	カモメ	<i>Sterna albifrons</i> Pallas	VU	NT
19	ハチクマ	タカ	タカ	<i>Pernis ptilorhynchus</i> (Temminck)	NT	VU
20	オオタカ	タカ	タカ	<i>Accipiter gentilis</i> (Linnaeus)	NT	NT
21	アカショウビン	ブッポウソウ	カワセミ	<i>Halcyon coromanda</i> (Latham)		VU
22	アカゲラ	キツツキ	キツツキ	<i>Dendrocopos major</i> (Linnaeus)		
23	アオゲラ	キツツキ	キツツキ	<i>Picus awokera</i> Temminck		

準絶滅危惧(NT)

No.	和名	目名	科名	学名	国ランク	県ランク
24	ヤマドリ	キジ	キジ	<i>Symaticus soemmerringii</i> (Temminck)		
25	オシドリ	カモ	カモ	<i>Aix galericulata</i> (Linnaeus)	DD	
26	カイツブリ	カイツブリ	カイツブリ	<i>Tachybaptus ruficollis</i> (Pallas)		
27	ササゴイ	ペリカン	サギ	<i>Butorides striata</i> (Linnaeus)		
28	コチドリ	チドリ	チドリ	<i>Charadrius dubius</i> Scopoli		
29	ヤマシギ	チドリ	シギ	<i>Scolopax rusticola</i> Linnaeus		NT
30	クサシギ	チドリ	シギ	<i>Tringa ochropus</i> Linnaeus		
31	イソシギ	チドリ	シギ	<i>Actitis hypoleucos</i> (Linnaeus)		
32	フクロウ	フクロウ	フクロウ	<i>Strix uralensis</i> Pallas		NT
33	サンショウクイ	スズメ	サンショウクイ	<i>Pericrocotus divaricatus</i> (Raffles)	VU	NT
34	サンコウチョウ	スズメ	カササギヒタキ	<i>Terpsiphone atrocaudata</i> (Eyton)		NT
35	コシアカツバメ	スズメ	ツバメ	<i>Hirundo daurica</i> Laxmann		
36	イワツバメ	スズメ	ツバメ	<i>Delichon dasypus</i> (Bonaparte)		
37	ミンサザイ	スズメ	ミンサザイ	<i>Troglodytes troglodytes</i> (Linnaeus)		NT
38	クロツグミ	スズメ	ヒタキ	<i>Turdus cardis</i> Temminck		NT
39	コサメビタキ	スズメ	ヒタキ	<i>Muscicapa dauurica</i> Pallas		NT
40	オオルリ	スズメ	ヒタキ	<i>Cyanoptila cyanomelana</i> (Temminck)		

情報不足(DD)

No.	和名	目名	科名	学名	国ランク	県ランク
41	ウズラ	キジ	キジ	<i>Coturnix japonica</i> Temminck et Schlegel	VU	VU
42	オオコノハズク	フクロウ	フクロウ	<i>Otus lempiji</i> (Horsfield)		NT

地域個体群(LP)

No.	和名	目名	科名	学名	国ランク	県ランク
43	ハチクマの渡り群(桑谷山系)	タカ	タカ	<i>Pernis ptilorhynchus</i> (Temminck)	NT	VU
44	サシバの渡り群(桑谷山系)	タカ	タカ	<i>Butastur indicus</i> (Gmelin)	VU	VU

(5) 爬虫類

① 岡崎市における爬虫類の概況

岡崎市にはカメ類（カメ目）、トカゲ類（有鱗目トカゲ亜目）、ヘビ類（有鱗目ヘビ亜目）の3群の爬虫類が生息する。以下、その3群ごとに概要を述べたい。

○ カメ類

岡崎市では2006年に市内でワニガメが見つかり、またその頃市内で外来生物であるミシシippiaカミミガメが急増していることが問題視され始めていた。そこで市の事業として、2007年に市内の34カ所のため池、2008年に市内の河川の10地点におけるカメの分布、生息の状況を調査した。その後、レッドデータブックの作成を目標の一つとした調査の一環として、2007-2008年にカメの分布、生息を調べた地点の追跡調査を2013年に行なうことができた。いずれの年の調査でも、生息地にワナを仕掛けてカメを採集して調べた。

その結果岡崎市内では、日本産のカメとしてイシガメ科のニホンイシガメ301頭、クサガメ23頭、そしてスッポン科のニホンスッポン40頭、外来のカメとして北アメリカ産のミシシippiaカミミガメ232頭の個体を確認した。また2013年の調査では3カ所の調査地点でニホンイシガメとクサガメの交雑個体を5頭捕獲した。

日本列島の固有種であるニホンイシガメは、市内では2007-2008年から2013年にかけて、目立った分布地の減少や各生息地における個体数の減少が見られなかったため、今回のレッドリストにおいては生息が危惧される種には挙げなかった。しかしながら、市内のニホンイシガメの生息に危機をもたらすいくつかの事態が進行していることが分かった。

ニホンイシガメと人為的移入の可能性が高いクサガメとの交雑個体が、2007-2008年の調査では採集されなかったにもかかわらず、2013年には1カ所の池、2カ所の河川の地点で捕獲された。ふつう生物の種間は生殖隔離されており、交雑が起こることはまれである。仮に種間交雑が起こったとしても、交雑個体にはふつう繁殖能力はない。ところがカメでは、イシガメ科やウミガメ科など、科の中で属間の交雑が起こることがあり、しかも交雑個体が繁殖能力を持つことがある。飼育下での経験から、ニホンイシガメとクサガメは交雑し、この交雑個体は有精卵を産めることが分かっている。ニホンイシガメとクサガメの交雑個体がいる個体群では、ニホンイシガメの集団の遺伝子に異質なクサガメの遺伝子が混入して拡がる、遺伝子汚染が生じてしまう。

また、調査の過程で捕獲した外来のカメは駆除しているにもかかわらず、ニホンイシガメの生息場所からミシシippiaカミミガメが減ってはいなかった。食物あるいは日光浴や越冬、産卵、ねぐらの空間を巡っての種間競争にニホンイシガメは曝され続けているのである。

ニホンイシガメは岡崎の水辺エコトーンの象徴的な動物である。上で述べたように、市内のニホンイシガメに生息の危機が迫っていることを考慮し、生息場所としての水辺エコトーンの確保、遺伝子汚染をもたらすクサガメ（とその交雑個体）や競争するミシシippiaカミミガメの除去といった対策を組織的に行えるようにすることを進言する。

クサガメは生物地理学的にやっかいな2つの問題を抱えた種である。このカメは日本列島の本州、四国、九州、朝鮮半島、中国東部、台湾に分布しているが、日本産のクサガメには遺伝子型が朝鮮半島あるいは中国のどちらかと共通している2タイプのあることが近年明らかになっており、日本に生息するクサガメは朝鮮半島および中国から人為的に導入された可能性が示唆されている。ただし現段階では、その可能性は否定できないが、朝鮮半島や中国の標本がきわめて少なく、結論が出ているわけではない。日本のクサガメのうち、中国タイプとされるものは、採集された個体の形態

の観察、あるいは聞き込み調査や文献によって中国か台湾から移入された可能性が高いと思われる。しかし朝鮮半島タイプのもは古くから日本に生息しており、逆に日本から朝鮮に移出して定着した可能性すらあるのである。ここではクサガメは日本産のカメであるとしておく。

もう1つの問題は、40～50年ほど前から西日本で養殖されたクサガメの幼体がペットとして流通するようになったことである。近年では中国からも養殖された幼体が輸入されている。そしてそれらの一部は野外に放逐されて定着している。いうまでもなく、日本産のカメといえども、他地域から持ち込まれて定着してしまうとそれは外来生物である。

愛知県のクサガメとニホンイシガメの分布を見ると、濃尾平野にはほぼクサガメしかおらず、知多半島と三河地方ではニホンイシガメが優占的である。文献調査や聞き込み調査を合わせて考えると、岡崎市を含めて三河地域では、クサガメは他地域から移入されて定着している可能性が高い。岡崎市では個体数も少なく分布も不連続である。またニホンイシガメに遺伝子汚染をもたらしていると考えられる。それらの事情から今回は、クサガメを岡崎市において生息が危惧される種とはしない。

ニホンスッポンも捕獲数が少なかったが、このカメは臆病なカメであまり姿を現さないことを考慮すると、他地域と比べても少ないとは言えない数が採集されたので、生息の危機にあるとは見なせない。なお、ニホンスッポンは食用として養殖するために各地に持ち込まれ、その個体が野外に広がっている地域がある。ただし観察されたり採集されたりしたニホンスッポンが在来のものか外来かを識別することはきわめて困難である。

○ トカゲ類

岡崎市にはトカゲ科のヒガシニホントカゲ、カナヘビ科のニホンカナヘビ、ヤモリ科のニホンヤモリの3種が分布している。生態系においては3種とも、昆虫などの陸生の小型の虫類を捕食し、ヘビ類や小型哺乳類、鳥類に捕食される生態的地位 (niche) にある。

トカゲについて、日本列島にはオカダトカゲが伊豆半島から伊豆諸島にかけて局所的に分布している以外は、北海道から九州にかけて広くニホントカゲが分布していると考えられていた。ところがDNAの分子系統解析から、東日本と極東ロシアの日本海沿岸地方に分布するものはニホントカゲとは別種であることが分かり、ヒガシニホントカゲとして2012年に新種記載された。

外部形態では、頭部の鱗である左右の前額板がヒガシニホントカゲでは接していて前額板の前後の額鼻板と額板が離れているのに対して、ニホントカゲでは前額板が左右に離れ、額鼻板と額板が接している。しかしこの形質の違いも9割程度の安定度しか無く、外部形態でこれら両種を見分けるのは難しい。ただし、分布の境界領域でも両種間の生殖隔離はほぼ成立しているので、ヒガシニホントカゲとニホントカゲは別種であることは間違いない。外部形態はよく似ているが、分泌物など生成する化学物質に種間の差があるのであろう。

両種の分布の境界は、輪川湾から琵琶湖を横断し、三重県、和歌山県内では中央構造線に沿ったラインである。したがって岡崎ではヒガシニホントカゲが分布しているとみなせる。

ヒガシニホントカゲとニホンカナヘビは昼行性で地上棲である。ヒガシニホントカゲよりもニホンカナヘビの方が草むらや灌木が多い場所を好む。岡崎市内ではヒガシニホントカゲもニホンカナヘビも都市部の緑地から山林にかけて広く多数の個体が見られる。

ニホンヤモリは夜行性で住家棲である。市内でも夏の夜に人家や社寺などの建物でよく見られる。

岡崎市では現在、ヒガシニホントカゲにもニホンカナヘビにもニホンヤモリにも生息の危機は無いと言って良いだろう。

○ ヘビ類

岡崎市にはタカチホヘビ科のタカチホヘビ、ナミヘビ科のジムグリ、アオダイショウ、シマヘビ、ヒバカリ、シロマダラ、ヤマカガシ、クサリヘビ科のニホンマムシの 3 科 8 種のヘビが確認されているか、あるいは分布している可能性が高い。生態系においては、カエルや小型爬虫類、あるいはネズミや食虫類などの小型哺乳類を捕食し、中型～大型の鳥類や中型哺乳類に捕食される生態的地位にある。

残念ながら今回はどの種についても、個体数の年変動を推測できるほどの調査ができなかった。その中でも、ヤマカガシ、ヒバカリ、シマヘビは食物をカエルに大きく依存している。1980 年頃から世界的に両生類が減少しており、岡崎市でも 7 種のカエルが本書に掲載されている。したがって、リストには挙げなかったが、ヤマカガシ、ヒバカリ、シマヘビについては今後個体群動態を注視する必要がある。

② 岡崎市における絶滅危惧種の概況

今回、岡崎市版レッドリストに掲載したタカチホヘビとシロマダラは夜行性で山地の林床に潜んでいることが多く、ヘビの調査でふつうに行われるルートセンサスでは見つけることが難しい。むしろ昆虫やクモなどの土壌動物の調査の時の方が見つかりやすいほどである。岡崎市市内においても、近隣の市町においてもそれほど見つかっておらず、これら 2 種のヘビの市内での個体群動態は推測できなかった。しかしながら山地の環境はタカチホヘビやシロマダラの生息には不適な形に明らかに変化しているので、注目すべき種としてこれら 2 種を情報不足 (DD) に挙げた。

(①及び②執筆者 矢部 隆)

③ 岡崎市爬虫類レッドリスト

目及び科の範囲、名称、配列は、「日本産爬虫両生類標準和名 (2013 年 11 月 3 日改訂)」(日本爬虫両棲類学会, 2013) に準拠した。

絶滅(EX)

(該当種なし)

絶滅危惧 I A類(CR)

(該当種なし)

絶滅危惧 I B類(EN)

(該当種なし)

絶滅危惧 II類(VU)

(該当種なし)

準絶滅危惧(NT)

(該当種なし)

情報不足(DD)

No.	和名	目名	科名	学名	国ランク	県ランク
1	タカチホヘビ	有鱗	タカチホヘビ	<i>Achalinus spinalis</i> Peters		DD
2	シロマダラ	有鱗	ナミヘビ	<i>Dinodon orientale</i> (Hilgendorf)		DD

(6) 両生類

① 岡崎市における両生類の概況

両生類は、尾のある仲間（有尾類）のイモリ、サンショウウオ類と、尾のない仲間（無尾類）のカエル類に大別される。岡崎市の両生類は有尾類 1 科 1 種、無尾類 4 科 13 種である。有尾類では、アカハライモリ 1 種が生息しているが、岡崎市では昔からサンショウウオ類がいたという話は聞かない（豊田市と刈谷市ではカスミサンショウウオが生息した）。無尾類（カエル類）13 種のうち、カジガエルとモリアオガエルの 2 種は平成に入って合併した旧額田地域に生息している。

長く厳しい冬も終わり立春が近づく頃、必ず訪れる暖かな日、冬眠から覚めたアカガエルが産卵のため水田に集まって来る。キャララッ、キャララッともフィリリー、フィリリーとも聞こえる小鳥のさえずりに似た声で鳴いて産卵する。産卵は一晩で終わり、産卵を終えたアカガエルは再び冬眠に入ってしまう。水田は無尽蔵のアカガエルの卵塊で埋め尽くされ、時には氷づけになることもあるが 2 月には孵化し、アカガエルのオタマジャクシでいっぱいになる。約 1 ヶ月遅れてここに登場するのがヒキガエルである。普段は鳴かないヒキガエルだが、この時はボーボー、クックッと低い声で鳴き、四方八方から這い出てくる。雌に比べて雄の方が圧倒的に多いので、雌を奪い合って雄がダンゴ状になって争う「カエル合戦」が展開される。「やせ蛙負けるな一茶これにあり」はヒキガエルの産卵風景を詠んだものである。再び水田はヒモ状のヒキガエルの卵塊でいっぱいになる。3 月といってもまだ寒く、ヒキガエルは再び冬眠場所に帰る。ヒキガエルは水田ばかりでなく民家の庭池や社寺の池などにも産卵する。

3 月、タネツケバナが水田の畦に咲き出すと、アカガエル、ヒキガエルも成長し、田植えのための準備が始まる。ツバメが飛び交いシュレーゲルアオガエルがあちこちで鳴き出す 5 月の水田は賑やかである。そこに登場するのがトノサマガエルである。水田がトノサマガエルで埋まった光景は今日では想像もできない。ガガガゲゲと鳴き交わし、苗代のイネ苗を抜く農家の人の手に纏わりついてくるほどだった。トノサマガエルの卵塊はアカガエルのそれと似ているが粘り気が少なく、手ですくい取れない。産卵後トノサマガエルはアカガエル、ヒキガエルと違い水田に留まって活動する。アマガエル、ツチガエル、シュレーゲルアオガエルも 5 月の水田が主な産卵場所である。アマガエルは庭のナツメや防火用水などに這い上がって産卵したりするが、主な産卵場所は水田であった。シュレーゲルアオガエルは早春から鳴き始めるが、5 月に他のカエルと違って畦の割れ目など泥中に泡状の卵塊を産む。アマガエルと似ていて慣れないと区別がつかないが、どちらも産卵を終えると周辺の山林などへ散っていく。

このように、水田は多くのカエル類の産卵場として重要な場所だったが、近年では水田の乾田化や圃場整備などによって生息環境は悪化している。ただ、このような状況下にあっても繁殖（といっても大繁殖ではないが）し、すっかり水田のカエルの代表的存在になったのがヌマガエルである。このカエルはトノサマガエルと違って年に何回も産卵し変態を終了する。トノサマガエルより小型で地味で見栄えのしないカエルだが、小さな体の割にギーギーと大きな声で鳴いて存在感をアピールする。

また、昭和 30～40 年代までの日本の家屋は野生動物の生活にあった構造になっていたようだ。縁の下、天井裏も出入りが自由で、ヒキガエル、アオダイショウ、スズメ、アブラコウモリ、ネズミ類などが生息の場所としていた。庭池にはトノサマガエルが居着いたし、庭木や家の窓ガラスにはアマガエルが見られた。夏の夜、家の燈火にはドウガネブイブイや大小の蛾などが集まり、縁の下から這い出したヒキガエルの餌となっていた。

1年で一番早く産卵するアカガエルにはニホンアカガエルとヤマアカガエルの2種がいるが、岡崎では普通は共生していたようだ。アカガエルは水田で育つが、カエルになると水田を離れて乾いた叢や山林の林床で生活する。水田から離れた山道やキノコ採りの林床にはヤマアカガエルをよく目にした。昭和40年代に入っても未舗装道路は多く、道路脇の溝も自然のままであり、生活排水、雨水もここを流れて川へ入った。溝から染み出る水により、普通道路の両脇は草むらになっていた。この草むらがカエル（特にアカガエル）の生息場所の一つだった。アカガエルなどのカエル類が多かったため、それを捕食するヘビ、特にヤマカガシやシマヘビも多かった。アカガエル、トノサマガエルはよくヘビの餌食になった。意外だが毒のあるヒキガエルもヤマカガシにはよく吞まれるのを見た。

② 岡崎市における絶滅危惧種の概況

昭和20年代まで、日本の自然は2000年来の姿を基本的には大きく変化させることなく保ち続けてきた。日本中にくまなく拓かれていた水田、水田を取り巻く里山、そこで営まれてきた人々の暮らしの中で、イモリやカエルなどの両生類は最も身近な生き物ではなかったか。昭和30年代まで、名鉄東岡崎駅周辺は今日では信じられない事だが水田で囲まれていた。

現在、トノサマガエルは激減し、産卵のにぎやかな鳴き声もめったに聞かれなくなった。最近のトノサマガエルはおびえているのか素早く泥に潜りこんでしまうため、撮影も容易でない。また、現在岡崎市では生息が確認できてないが、ナゴヤダルマガエルも昭和50年代まではトノサマガエルと共生していた。本種はトノサマガエルとよく似ており、農家の人でさえ「そういうのはみなトノサマガエルと言うのじゃないのか」と言うほどであった。当時どちらが多かったかはっきり記憶していないが、両種は水田とその周辺で混生していたが厳密にはちゃんと住み分けしていたように思われる。ナゴヤダルマガエルは水田の水路、水溜り、池状の部分を好んで棲み、動作もトノサマガエルほど敏捷ではなかったようだ。昭和55年頃の岡崎市史編纂にあたっての調査時には、まだかなり本種を認める事ができた。

カジカガエルは昭和30年代水系の汚濁が始まる前は乙川の上流部に多く生息していた。夏、闇苅溪谷では、林道沿いの谷川でカジカガエルが観察できた。水系の汚濁や溪谷の観光開発などによって一時姿を消したようであったが、平成の現在、乙川の淡淵から闇苅溪谷まで断続的に美しい鳴き声が聞かれるようになった。モリアオガエルは標高300～400mの山間部に生息し、旧額田町域で確認されている。

アカハライモリはかつては山間部ばかりか丘陵地の先端部まで広く分布していたが激減した。開発や耕作放棄による水田の荒廃で生息地が消滅した事が最大の原因であろう。現在でも、旧額田町域や常盤地区などでは昔ながらの生息環境が残っているので大切に保護したい。

両生類（カエル類）は魚類のように水系の水質汚濁で壊滅的な影響を受けるような事は免れたが、高度経済成長に伴う農薬の使用はカエル類にも影響を及ぼし、カジカガエルなど乙川に生息する種は一時姿が消えた。水田をすみかとする種は何とか持ちこたえたようであったが、昭和50年代末から平成にかけて水田環境の変化による影響を受けた。機械化と農薬、化成肥料の大量使用による稲作農法の省力化が急速に進められた。初めは耕運機、田植え機、稲刈り機などの小型機械が使用されていたが、後に大型田植え機、トラクター、コンバインなどの大型機械が登場するようになった。この大型機械の投入に伴い、機械が沈むのを防ぐため、1年中水の張られた昔ながらの水田は乾田化された。このため、田植え時期と稲の開花結実期には田に水が入るが、収穫後、次の年の田植え時

期まで、水田は畑と同じ状態となった。また、大型機械が十分機能出来るよう圃場整備が行われ、出来るだけ広く平坦にされた。農業用水もパイプが張り巡らされ、バルブを開閉することで水の出し入れは容易になった。米の作付制限（減反政策）もさらなる水田の減少をもたらし、水田と畑作とが1～2年ごとに繰り返されることになり、山間の小規模水田は耕作放棄されて荒廃していった。

このような水田環境の変化により、カエル類は最大の産卵場所を失ってしまったといえる。アカガエルは1～2月、ヒキガエルは2～3月が産卵期であるが、この時期には水がなくなっている。田植え時期の水がある水田に産卵できるトノサマガエルは、産卵は出来るがオタマジャクシの後足が出る頃に「中干し」というイネの分株（ぶんけつ）を押さえる農法が普及したため、変態終了目前に乾燥死するケースが多く見られる。このため、トノサマガエルも山間の水田のように乾田化が不十分な場所にしか生息出来ない状況である。アマガエル、ツチガエル、シュレーゲルアオガエルも同様である。

かつて広大な水田地帯であった六ツ美、矢作地区も以前に比べカエル類の姿も声も少なくなった。食物連鎖の底辺として動物相を支えてきた最大のグループ、カエル類の減少は地域の生態系に大きな影響を与えたと考えられる。佐渡のトキ、兵庫のコウノトリの絶滅も水田の生物、特にカエル類の減少にあると言えないか。一方で、さしたる天敵のいない外来種のウシガエルは市内各所に蔓延し、各地で整備されているビオトープにも進出し問題となっている。

限られたカエル類の生息環境がこれ以上損なわれることのないようにしなければならない。

（①及び②執筆者 永井 貞）

③ 岡崎市両生類レッドリスト

目及び科の範囲、名称、配列は、「日本産爬虫両生類標準和名（2013年11月3日改訂）」（日本爬虫両棲類学会, 2013）に準拠した。

絶滅(EX)

(該当種なし)

絶滅危惧 I A類(CR)

(該当種なし)

絶滅危惧 I B類(EN)

(該当種なし)

絶滅危惧 II類(VU)

No.	和名	目名	科名	学名	国ランク	県ランク
1	ニホンアカガエル	無尾	アカガエル	<i>Rana japonica</i> Boulenger		
2	ヤマアカガエル	無尾	アカガエル	<i>Rana ornativentris</i> Werner		DD

準絶滅危惧(NT)

No.	和名	目名	科名	学名	国ランク	県ランク
3	アカハライモリ	有尾	イモリ	<i>Cynops pyrrhogaster</i> (Boie)	NT	DD
4	トノサマガエル	無尾	アカガエル	<i>Rana nigromaculata</i> Hallowell	NT	
5	ツチガエル	無尾	アカガエル	<i>Glandirana rugosa</i> (Temminck et Schlegel)		DD
6	モリアオガエル	無尾	アオガエル	<i>Rhacophorus arboreus</i> (Okada et Kawano)		NT
7	カジカガエル	無尾	アオガエル	<i>Buergeria buergeri</i> (Temminck et Schlegel)		NT

情報不足(DD)

No.	和名	目名	科名	学名	国ランク	県ランク
8	ナゴヤダルマガエル	無尾	アカガエル	<i>Rana porosa brevipoda</i> Ito	EN	VU

(7) 魚 類

① 岡崎市における魚類の概況

岡崎市は大河矢作川が市を南北に流れ、三河湾にそそいでいる。この矢作川に市の北部から順に巴川、青木川、乙川が多くの支流を集めてほぼ東西に流れて合流する。他に矢作、六美地区の沖積平野には鹿乗川、広田川が流れ、市外でやはり矢作川に合流している。岡崎市のすべての川は矢作川を通して海と繋がっている。

市内にはため池が多く、地図上からプロットしただけでも 150 余にのぼる。その多くは旧市城南東部の丘陵地に集中している。これは、水田の多くが主要な河川床より高い位置にあり河川からの引水が困難であることと、丘陵山林からの水補給が容易なためである。

川やため池と同様に魚類の生息環境として重要であったのが水田である。本市では平野部はもとより丘陵地から山間の谷の奥まで可能な限り水田が拓かれてきた。かつては「水田」という字の通り、原則として一年中水が張られ、魚類、両生類、その他多くの生物の重要な生息場所であった。例えばニホンウナギは海で生まれ、川へ、池へ、更に水田へ移動する。水田に定着するものあり、成熟すると同じコースを辿って海へ帰る。水田も最終的には川、海と繋がって豊かな生態系を作っていたが、現在では乾田化や圃場整備などにより、多くの水田が魚類の生息には適さない環境となっている。

昭和 20 年代、当時の川には魚類の移動（遡上や降河）を妨げる構造物はほとんどなく、あったとしても魚道が設置されていた。川岸も自然状態でコンクリート護岸はなく、川底にはクロモ、セキショウモ、川岸にはアシ、ショウブ、ヤナギ類が繁茂し、泥底はあってもヘドロなどはなかった。また、川は下流部を除いて瀬と淵があり、ほぼ全域で魚種が豊富であった。どの川にも天然アユが普通に見られ、乙川の殿橋付近はアユの産卵場でもあった。海から遡上するボラの仔魚（デンボコと呼んだ）も乙川で釣れた。フナ、コイは川にもため池にも多く、コイは「野ゴイ」と呼ばれ食用として喜ばれた。ニホンウナギの仔魚（メソと呼んだ）の遡上する季節には、川は仔ウナギであふれた。厳冬期、川魚は寒バエ、寒ブナと呼ばれ珍重されたが、特に現在絶滅したヤリタナゴは冬に釣って食べる事を楽しむ人がいたのである。ため池も完全に隔離された池はなく、水田、水路、沢により川と繋がっていた。農薬や生活排水による水質汚濁もほとんど見られず、ヒシ、ヒツジグサ、ジュンサイ、アシなどが生育し、主としてフナやコイが放飼され、天然のニホンウナギが定着していた。これらのため池にはモロコ類やメダカが生息し、マツカサガイやドブガイの生息する池にはヤリタナゴが生息していた。水田はナマズ、フナなどの稚魚の成育場としても重要な場所であり、ニホンウナギは成魚として水田にも定着していた。

しかし、昭和 30 年代の高度経済成長以降、中性洗剤の普及、農薬や化成肥料の大量使用などによって水系の水質汚濁が顕著になった。また、その後、河川・池沼の改修工事に伴う川岸のコンクリート化や川底の平均化、堰堤の設置による河川の寸断、大規模な土地造成工事、水田の乾田化や圃場整備などによって魚類の生息環境は著しく悪化し、魚類相は荒廃した。昭和 30 年代以前に本市の水系に魚類が何種類どのような状態で生息していたかは正確な記録がないので判らない。記録としては昭和 38 年の「矢作川水系の魚類」（梅村諒二, 1963）が初めてであり、22 科 60 種が報告され、そのうち本市に産するものは 14 科 40 種とされている。荒廃した魚類相も昭和 40 年代以降徐々に回復し、昭和 50 年代には外見上は荒廃前の状態に戻ったかに見えた。筆者らは 1977 年（昭和 52 年）から 1982 年（昭和 57 年）にかけて市内の河川とため池の魚類調査を行い、15 科 44 種（遡河魚アユ 1 種、降河魚ニホンウナギ 1 種、汽水魚スズキ、ボラ、マハゼ、カワアナゴ 4 種、純淡水魚 38 種）

を確認した。筆者の記憶とその後の梅村氏の報告による荒廃前の魚類相と、その後実施した筆者らの調査結果を比較すると、種数においては荒廃前の姿に戻っているように見える。しかし、かつては市内に広く分布していたものが絶滅もしくは激減してしまっていたり、逆にかつてはみられなかった種が新しく分布を広げているなど、種間における分布状態や個体数の割合は荒廃前のそれとはかなり異なった状態にあると考えられた。

新しく分布を拡大した魚類は、オオクチバス、ブルーギル、カダヤシ、カムルチーなどの外来魚である。オオクチバス、ブルーギルは、昭和 50 年代に水質が回復した後、人為的な放流により姿を見せた。その後、スポーツフィッシングの流行とともに急速に分布を広げ、現在では市内のため池の約 9 割に生息し、在来の生態系が大きく損なわれた。近年では外来魚対策として各地で池干しによる駆除が行われているが、ため池ばかりでなく河川にまで繁殖が広がってしまったため、根絶は困難な状況となっている。同様に人の手で持ち込まれたカダヤシもメダカを圧迫し、問題となっている。また、ため池のマブナもいつの間にか人為的に放流されたヘラブナに圧迫され、現在マブナの残っている池は数えるほどしかない。同様に人為的に大量に放流されたコイも他の水生生物を圧迫し、生態系に悪影響を与えることが問題視されている。

② 岡崎市における絶滅危惧種の概況

岡崎市で絶滅した魚類はウシモツゴとヤリタナゴである。ウシモツゴは洞町の天上池でカワバタモロコと共に発見されたが、オオクチバス（ブラックバス）の放流とため池改修工事で絶滅した。ヤリタナゴは市内の川に広く分布し個体数も多かったが、水質汚濁によって絶滅し、上流部に残存する事もなく川から姿を消した。市内 2 ヶ所のため池に残っているのが発見されたが、ため池改修工事、オオクチバスやタイリクバラタナゴの放流などにより絶滅した。旧額田町域で現在も生息しているネコギギは、昭和 33 年に旧市域舞木町の山綱川で採集され、近くの鉢地川や青木川にも生息したというが、旧市域ではその後の水質汚濁などによって絶滅したと思われる。

そのほか、カワバタモロコ、メダカ（ミナミメダカ）、スナヤツメ、カワヒガイ、ホトケドジョウ、トウカイナガレホトケドジョウ、アカザ、ドンコなど多くの種が減少傾向にある。カワバタモロコはこの地方ではキンパの名で知られ、乙川のような川からため池、水田の水路など、どこにでもいた魚であるが、主に水質汚濁によってその多くが姿を消してしまった。その後の調査で市内の 3 ヶ所の池（天上池、馬頭池、二ツ池）で発見された。どの池も水田や果樹園の上流部に位置し、農薬類の流入がなかったことから、他の池での絶滅は主に農薬類が原因だと推測された。しかし、天上池と馬頭池では改修工事で絶滅し、二ツ池も平成に入って工場用地造成で他へ移植され、これが岡崎産唯一のカワバタモロコである。

メダカ、ホトケドジョウは昔ながらの水の張られた水田が乾田化され、圃場整備などによって生息場所を失ったことが主な減少の要因である。また、メダカは外来種のオオクチバス、ブルーギル、カダヤシにも圧迫され、絶滅が危惧される状態である。

一時、絶滅したかと思われたスナヤツメは乙川上流部で発見された。カワヒガイは水質汚濁などによって産卵床の二枚貝が少なくなり、ほとんど姿を見なくなった。ドンコ、アカザも河川改修の影響で生息地を失って減少し、今日では上流部に局所的に残っている状況である。

比較的最近、新種として登場したものにトウカイナガレホトケドジョウがある。道路建設に伴う環境調査によって旧額田町域で発見され話題になった。ニホンウナギは河川改修、ため池改修工事などで生息地が減少し、さらに大小の堰堤で川が寸断されて海から遡上ができなくなったために減

少していると考えられる。その他では、トウカイコガタスジシマドジョウ、カジカ（大卵型）がいずれも市内の限られた場所に生息している。

これらの絶滅危惧種のほか、マブナ、モツゴ、タモロコなども元々ため池に多い魚だったが、ため池改修工事、外来魚・ヘラブナ・コイの放流、池の荒廃などによって減少しつつある。これらの種が絶滅危惧種とならぬよう、魚道の設置、水田の価値の再評価、外来魚対策など、生息環境の保全と回復に努めることが重要である。

(①及び②執筆者 永井 貞)

③ 岡崎市魚類レッドリスト

目及び科の範囲・名称・配列、和名及び学名は、原則として「日本産魚類検索 全種の同定 第三版」(中坊徹次編, 2013) に準拠した。科内の配列については、原則として「日本産野生生物目録— 本邦産野生動植物の種の現状— (脊椎動物編)」(財団法人自然環境研究センター, 1993) に準拠した。

絶滅(EX)

No.	和名	目名	科名	学名	国ランク	県ランク
1	ヤリタナゴ	コイ	コイ	<i>Tanakia lanceolata</i> (Temminck et Schlegel)	NT	NT
2	ウシモツゴ	コイ	コイ	<i>Pseudorasbora pumila</i> subsp.	CR	CR

絶滅危惧 I A類(CR)

(該当種なし)

絶滅危惧 I B類(EN)

No.	和名	目名	科名	学名	国ランク	県ランク
3	カワバタモロコ	コイ	コイ	<i>Hemigrammocypripis rasborella</i> Fowler	EN	VU
4	ネコギギ	ナマズ	ギギ	<i>Tachysurus ichikawai</i> (Okada et Kubota)	EN	EN

絶滅危惧 II類(VU)

No.	和名	目名	科名	学名	国ランク	県ランク
5	メダカ(ミナメダカ)	ダツ	メダカ	<i>Oryzias latipes</i> (Temminck et Schlegel)	VU	NT

準絶滅危惧(NT)

No.	和名	目名	科名	学名	国ランク	県ランク
6	スナヤツメ	ヤツメウナギ	ヤツメウナギ	<i>Lethenteron</i> spp.	VU	VU
7	カワヒガイ	コイ	コイ	<i>Sarcocheilichthys variegatus variegatus</i> (Temminck et Schlegel)	NT	NT
8	ホトケドジョウ	コイ	ドジョウ	<i>Lefua echigonia</i> Jordan et Richardson	EN	VU
9	トウカイナガレホトケドジョウ	コイ	ドジョウ	<i>Lefua</i> sp.	EN	VU
10	アカザ	ナマズ	アカザ	<i>Liobagrus reinii</i> Hilgendorf	VU	NT
11	ドンコ	スズキ	ドンコ	<i>Odontobutis obscura</i> (Temminck et Schlegel)		NT

情報不足(DD)

No.	和名	目名	科名	学名	国ランク	県ランク
12	ニホンウナギ	ウナギ	ウナギ	<i>Anguilla japonica</i> Temminck et Schlegel	EN	
13	トウカイコガタスジシマドジョウ	コイ	ドジョウ	<i>Cobitis minamorii tokaiensis</i> Nakajima	EN	NT
14	カジカ大卵型	スズキ	カジカ	<i>Cottus pollux</i> Günther	NT	VU

(8) 昆虫類

① 岡崎市における昆虫類の概況

岡崎市は、矢作川がもたらした沖積平野に開けた城下町であるが、平成 18 年（2006 年）に隣接する額田地域（旧額田町）と合併し、約 38km²の広大な山岳地を含む多様性のある自然を有する市が誕生した。

合併前の岡崎市の昆虫相は、新編岡崎市史の「岡崎の動物」（新編岡崎市史編さん委員会、1985）で詳しくまとめられているが、その後の河川や農耕地の整備、居住環境の変化などで、市内の昆虫相は大きく変わってきた。しかし、この度の合併で森林帯を多く含む額田地域が加わり、市の昆虫類の分布相の多様性が拡大し、かけがえのない存在となった。

岡崎市の昆虫類の大要は、主として低地温帯性のものが主流である。豊田市、新城市などの北からの分布の流れは顕著でなく、三河湾沿いの南からの流れも同様であり、市固有種も比較的多く分布している。これは、市が三河湾からやや離れた内陸に位置しており、愛知県東部の山岳地に連続する森林帯に接していることや、東部から南部の一部が山地であるため、南からの温暖な空気の流れが妨げられており、暖帯系の昆虫が飛来しにくい環境にあること、西から伊吹おろしの風がまともに吹くため、冬は寒くて夏はやや内陸的な気候を有していることなどに起因しているように思われる。

② 岡崎市における絶滅危惧種の概況

岡崎市は、前述のように西に開いた盆地的な地形をしているため、30 年ほど前までは、ツマグロヒョウモンは市内では越冬できなかつたし、クロコノマチョウなどの暖地系の種の分布も制限されていた。ヒメハルゼミは、山中八幡宮の社叢林に分布しており、古来にこの一帯が照葉樹林で覆われていた頃からの遺存種で、市の天然記念物に指定されている。ヒメヒカゲ（EX）やウラナミジャノメ（CR）は、市内に点在する湿地に局所的に分布していたが、ヒメヒカゲは絶滅した。クロヒカゲモドキ（VU）は、蔵次町周辺にのみ生息している。エゾゼミは、豊田市、新城市には広く分布するものの、岡崎市では、東部の切山町周辺に分布が限られており、ミンミンゼミも、本宮山周辺など東部の山地帯に局所的に生息しているのみである。

市の西部を縦走する一級河川の矢作川の河川敷と堤防、その河畔林の存在も岡崎市の昆虫類の分布相に大きな役割を果たしている。

下佐々木町の矢作川堤防には、シルビアシジミ（EX）が分布していたが絶滅した。現在では、ジャコウアゲハやヒメボタル（NT）などの重要な繁殖場になっているし、河川敷の砂地帯には貴重種のジュウジミズギワコメツキ（NT）が小集団で分布している。

また、往時の矢作川はあちこちと蛇行した流れで、一帯が湿地や沼地であった。現在でもその頃からの古い池や沼、河川が残っているが、どこも水の汚濁や外来種の繁殖などで、水生昆虫類は絶滅に近い状態にある。しかし、市が保全している北山湿地や小呂湿地、おかげき自然体験の森では、ヒメタイコウチ（NT）やハッチョウトンボ（NT）、ツヤネクイハムシ（VU）などが分布しているし、北山湿地ではギフチョウ（NT）が分布している。

ギフチョウは、往時には、岡崎市明大寺丘陵地、それに連続する桑谷山周辺、宮路山、五井山を経て豊橋市内（葦毛湿原、石巻山等）、静岡県西部にまで、ほぼ連続して分布していたが、岡崎市を除く愛知県南東部の産地では絶滅した。岡崎市では、北山湿地周辺と中伊町周辺にのみ生息しており、市の指定希少野生動植物種として捕獲禁止にして保全している。この種は、もともと農耕地周

辺の里山で繁殖、幼虫が里山の間伐雑木林の林床で育ってきたヒメカンアオイを食してきた種であり、山林に手を入れていた時代には、人との共生関係にあった種である。この種のように人為的に山林に手入れをすれば、今でも増える種もいるが、生態系のバランスの崩れで絶滅に追いやられている種の中には、近親交配で遺伝子に変異が生じ、人為作用だけでは復活しない種もいる。一度絶滅状態に追いやられると、その種を元に戻すことは簡単ではなく、自然保護の大切さや困難さは、種を捕獲しないことや食草を保全することなどは別の問題も多くあることを知らなくてはならない。

市の中央を横断して流れる乙川は、額田地域の谷水を集めて矢作川に開口しているが、この河川には、古くから国の史跡名勝天然記念物に指定されているゲンジボタルが発生しており、清流に生息するナベブタムシ (NT) やミズカマキリ (NT)、コオイムシやゲンバイトンボ (EN)、オオムラサキ (NT) なども分布している。上流部の闇苧溪谷には、ムカシトンボ (VU) やイワコエグリトビケラ (NT) も見出されているし、ホンダウチビクロコメツキ (VU) は、ここが新種の原因地になっている。

また、額田地域の集落周辺の谷間に古くから残されている池には、ミズスマシ (VU) やミズカマキリ (NT)、オオアメンボ (NT) なども分布しており、谷間の水溜りには、クロゲンゴロウ (VU) も生息している。

このように、岡崎市の多様性のある自然環境の中に生息している昆虫類は、いずれも食物連鎖での底辺に位置しており、それより上位の動物類の多様性に深く関与している。市の豊かな自然を作ること、岡崎市民の豊かな人の心の支えであることを改めて考えて、周辺の自然の四季折々の動きを注意して見守り、岡崎市のより豊かな多様性のある自然を育てていきたいと思う。

(①及び②執筆者 大平仁夫・杉坂美典)

③ 岡崎市昆虫類レッドリスト

目の範囲、名称、配列は、「日本産野生生物目録一本邦産野生動植物の種の現状－(無脊椎動物編Ⅱ)」(財団法人自然環境研究センター, 1995) に準拠した。目内の科の範囲、名称、配列は、目ごとに以下の文献を基に、新しい知見を加え整理した。なお、チョウ目については、チョウ類とガ類に区分し、チョウ類・ガ類の順に配列した。

- ・環境省編, 1995. 日本産野生生物目録一本邦産野生動植物の種の現状－(無脊椎動物編Ⅱ). 財団法人自然環境研究センター. (トンボ目、カメムシ目の一部、コウチュウ目)
- ・岡田正哉, 2001. カマキリのすべて. トンボ出版. (カマキリ目)
- ・日本直翅類学会編, 2006. バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑. 北海道大学出版会. (バッタ目)
- ・川合禎次・谷田一三 共編, 2005. 日本産水生昆虫 科・属・種への検索. 東海大学出版会. (カメムシ目の一部、トビケラ目)
- ・猪又敏男ほか, 2010. 日本産蝶類和名学名便覧. 日本昆虫学会. (チョウ目チョウ類)
- ・井上寛ほか, 1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社. (チョウ目ガ類)

絶滅(EX)

No.	和名	目名	科名	学名	国ランク	県ランク
1	アオヤンマ	トンボ	ヤンマ	<i>Aeschnophlebia longistigma</i> Selys	NT	VU
2	フタスジサナエ	トンボ	サナエトンボ	<i>Trigomphus interruptus</i> (Selys)	NT	VU
3	オグマサナエ	トンボ	サナエトンボ	<i>Trigomphus ogumai</i> Asahina	NT	VU
4	トラフトンボ	トンボ	エゾトンボ	<i>Epithea marginata</i> (Selys)		NT
5	ベッコウトンボ	トンボ	トンボ	<i>Libellula angelina</i> Selys	CR	CR
6	シルビアシジミ	チョウ	シジミチョウ	<i>Zizina emelina</i> (de l'Orza)	EN	EX
7	ヒメヒカゲ	チョウ	タテハチョウ	<i>Coenonympha oedippus</i> (Fabricius)	CR	CR

絶滅危惧 I A類(CR)

No.	和名	目名	科名	学名	国ランク	県ランク
8	ホソクロマゲンゴロウ	コウチュウ	ゲンゴロウ	<i>Platambus optatus</i> (Sharp)		
9	ツヤヒラタコメツキ	コウチュウ	コメツキムシ	<i>Aganohypoganus mirabilis</i> (Miwa)		VU
10	ツマグロキチョウ	チョウ	シロチョウ	<i>Eurema laeta</i> (Boisduval)	EN	
11	ウラナミジヤノメ	チョウ	タテハチョウ	<i>Ypthima multistriata</i> Butler	VU	VU

絶滅危惧 I B類(EN)

No.	和名	目名	科名	学名	国ランク	県ランク
12	ゲンバイトンボ	トンボ	モノサシトンボ	<i>Platycnemis foliacea sasakii</i> Asahina	NT	EN
13	キトンボ	トンボ	トンボ	<i>Sympetrum croceolum</i> (Selys)		EN
14	タガメ	カメムシ	コオイムシ	<i>Lethocerus deyrollei</i> (Vuillefroy)	VU	EN
15	ゲンゴロウ	コウチュウ	ゲンゴロウ	<i>Cybister japonicus</i> Sharp	VU	EN
16	ミヤマチャバネセセリ	チョウ	セセリチョウ	<i>Pelopidas jansonis</i> (Butler)		EN

絶滅危惧 II類(VU)

No.	和名	目名	科名	学名	国ランク	県ランク
17	オオイトトンボ	トンボ	イトトンボ	<i>Paracercion sieboldii</i> (Selys)		VU
18	ムスジイトトンボ	トンボ	イトトンボ	<i>Paracercion melanotum</i> (Selys)		
19	ムカシトンボ	トンボ	ムカシトンボ	<i>Epiophlebia superstes</i> (Selys)		
20	コシボソヤンマ	トンボ	ヤンマ	<i>Boyeria maclachlani</i> (Selys)		
21	ルリボシヤンマ	トンボ	ヤンマ	<i>Aeshna juncea</i> (Linnaeus)		
22	ホンサナエ	トンボ	サナエトンボ	<i>Gomphus postocularis</i> Selys		
23	タベサナエ	トンボ	サナエトンボ	<i>Trigomphus citimus tabei</i> Asahina	NT	
24	チッチゼミ	カメムシ	ゼミ	<i>Kosemia radiator</i> (Uhler)		
25	イトアメンボ	カメムシ	イトアメンボ	<i>Hydrometra albolineata</i> (Scott)	VU	VU
26	クロゲンゴロウ	コウチュウ	ゲンゴロウ	<i>Cybister brevis</i> Aubé	NT	VU
27	ミズスマシ	コウチュウ	ミズスマシ	<i>Gyrinus japonicus</i> Sharp	VU	
28	アオカナブン	コウチュウ	コガネムシ	<i>Rhomborrhina unicolor</i> Motschulsky		
29	クロマダラタムシ	コウチュウ	タムシ	<i>Nipponobuprestis querceti</i> (E.Saunders)		VU
30	ホングウチビクロコメツキ	コウチュウ	コメツキムシ	<i>Ampedus honguanus</i> Ôhira		
31	サトヤマシモフリコメツキ	コウチュウ	コメツキムシ	<i>Actenicerus kidonoi</i> Ôhira		NT
32	ウンモンテントウ	コウチュウ	テントウムシ	<i>Anatis halonis</i> Lewis		
33	ムツキボシツツハムシ	コウチュウ	ハムシ	<i>Cryptocephalus ohnoi</i> Kimoto		
34	ツヤネクイハムシ	コウチュウ	ハムシ	<i>Donacia nitidior</i> (Nakane)		
35	ミヤマヒラタハムシ	コウチュウ	ハムシ	<i>Gastrolina peltoides</i> (Geber)		
36	ギンイチモンジセセリ	チョウ	セセリチョウ	<i>Leptalina unicolor</i> (Bremer et Grey)	NT	VU
37	ウラクロシジミ	チョウ	シジミチョウ	<i>Iratsume orsedice</i> (Butler)		
38	クロヒカゲモドキ	チョウ	タテハチョウ	<i>Lethe marginalis</i> (Motschulsky)	EN	VU

準絶滅危惧(NT)

No.	和名	目名	科名	学名	国ランク	県ランク
39	モートンイトトンボ	トンボ	イトトンボ	<i>Mortonagrion selenion</i> (Ris)	NT	NT
40	マルタンヤンマ	トンボ	ヤンマ	<i>Anaciaeschna martini</i> (Selys)		
41	キイロサナエ	トンボ	サナエトンボ	<i>Asiagomphus pryeri</i> (Selys)	NT	NT
42	キイロヤマトンボ	トンボ	エゾトンボ	<i>Macromia daimoji</i> Okumura	NT	NT
43	ハッチョウトンボ	トンボ	トンボ	<i>Nannophya pygmaea</i> Rambur		
44	ヒナカマキリ	カマキリ	カマキリ	<i>Amantis nawai</i> (Shiraki)		NT
45	ツツレサセコオロギ	バッタ	コオロギ	<i>Velarifictorus micado</i> (Saussure)		
46	ミツカドコオロギ	バッタ	コオロギ	<i>Loxoblemmus doenitzii</i> Stein		
47	クチキコオロギ	バッタ	マツムシ	<i>Duolandrevus ivani</i> (Gorochov)		NT
48	ハルゼミ	カメムシ	ゼミ	<i>Terpnosia vacua</i> (Olivier)		
49	オオアメンボ	カメムシ	アメンボ	<i>Aquarius elongatus</i> (Uhler)		NT
50	ヒメタイコウチ	カメムシ	タイコウチ	<i>Nepa hoffmanni</i> Esaki		NT
51	ミズカマキリ	カメムシ	タイコウチ	<i>Ranatra chinensis</i> (Mayer)		
52	ナベバタムシ	カメムシ	ナベバタムシ	<i>Aphelocheirus vittatus</i> Matsumura		NT
53	アカスジキンカメムシ	カメムシ	キンカメムシ	<i>Poecilocoris lewisi</i> Distant		
54	ミカワヤマトオサムシ	コウチュウ	オサムシ	<i>Carabus yamato ojikai</i> Imura et Mizusawa		
55	ヒメマイマイカブリ	コウチュウ	オサムシ	<i>Damaster blaptoides oxuroides</i> Schaum		
56	ガムシ	コウチュウ	ガムシ	<i>Hydrophilus acuminatus</i> (Motschulsky)	NT	
57	クロシデムシ	コウチュウ	シデムシ	<i>Nicrophorus concolor</i> Kraatz		
58	ネプトクワガタ	コウチュウ	クワガタムシ	<i>Aegus laevicollis subnitidus</i> Waterhouse		
59	スジクワガタ	コウチュウ	クワガタムシ	<i>Dorcus striatipennis striatipennis</i> (Motschulsky)		
60	ムネアカセンチコガネ	コウチュウ	ムネアカセンチコガネ	<i>Bolbocerosoma nigroplagiatum</i> (Waterhouse)		
61	ゴホンダイコクコガネ	コウチュウ	コガネムシ	<i>Copris acutidens</i> Motschulsky		
62	ツノコガネ	コウチュウ	コガネムシ	<i>Liatongus phanaeoides</i> (Westwood)		
63	マルツヤマグソコガネ	コウチュウ	コガネムシ	<i>Aphodius (Sinodiptera) troitzkyi</i> Jacobson		
64	オオフタホシマグソコガネ	コウチュウ	コガネムシ	<i>Aphodius (Aphodius) elegans</i> Allibert		
65	ヒゲコガネ	コウチュウ	コガネムシ	<i>Polyphylla laticollis</i> Lewis		
66	ヤマトアオドウガネ	コウチュウ	コガネムシ	<i>Anomala japonica</i> Arrow		NT

67	アカマダラハナムグリ	コウチュウ	コガネムシ	<i>Poecilophilides rusticola</i> (Burmeister)	DD	NT
68	クロカナブン	コウチュウ	コガネムシ	<i>Rhomborrhina polita</i> Waterhouse		NT
69	ジュウジミズギワコメツキ	コウチュウ	コメツキムシ	<i>Fleutiauxellus cruciatus</i> (Candèze)		NT
70	ヒメボタル	コウチュウ	ホタル	<i>Luciola parvula</i> Kiesenwetter		
71	ヘイケボタル	コウチュウ	ホタル	<i>Luciola lateralis</i> Motschulsky		
72	カタキンイロジョウカイ	コウチュウ	ジョウカイボン	<i>Themus ohkawai</i> M.Sato		
73	カメノコテントウ	コウチュウ	テントウムシ	<i>Aiolocaria hexaspilota</i> (Hope)		
74	ハラグロオオテントウ	コウチュウ	テントウムシ	<i>Callicaria superba</i> (Mulsant)		
75	ヒラヤマコブハナカミキリ	コウチュウ	カミキリムシ	<i>Enoploderes bicolor</i> Ohbayashi		
76	トラフカミキリ	コウチュウ	カミキリムシ	<i>Xylotrechus chinensis</i> (Chevrolat)		
77	セダカコブヤハズカミキリ	コウチュウ	カミキリムシ	<i>Parechthistatus gibber shibatai</i> (Miyake)		
78	ルイスジンガサハムシ	コウチュウ	ハムシ	<i>Thlaspidia lewisii</i> (Baly)		
79	イワコエグリトビケラ	トビケラ	コエグリトビケラ	<i>Manophylax futabae</i> Nishimoto		NT
80	ギフチョウ	チョウ	アゲハチョウ	<i>Luehdorfia japonica</i> Leech	VU	NT
81	ウスバシロチョウ	チョウ	アゲハチョウ	<i>Parnassius citrinarius</i> Motschulsky		
82	ミドリシジミ	チョウ	シジミチョウ	<i>Neozephyrus japonicus</i> (Murray)		
83	ウラギンスジヒョウモン	チョウ	タテハチョウ	<i>Argyronome laodice</i> (Pallas)	VU	NT
84	オオウラギンスジヒョウモン	チョウ	タテハチョウ	<i>Argyronome ruslana</i> (Motschulsky)		
85	クモガタヒョウモン	チョウ	タテハチョウ	<i>Nephargynnis anadyomene</i> (C.Felder et R.Felder)		
86	ウラギンヒョウモン	チョウ	タテハチョウ	<i>Fabriciana adippe</i> ([Denis et Schiffermüller])		
87	ミスジチョウ	チョウ	タテハチョウ	<i>Neptis philyra</i> Ménétrières		
88	オオミスジ	チョウ	タテハチョウ	<i>Neptis alwina</i> (Bremer et Grey)		
89	スミナガシ	チョウ	タテハチョウ	<i>Dichorragia nesimachus</i> Doyère		
90	サカハチチョウ	チョウ	タテハチョウ	<i>Araschnia burejana</i> Bremer		
91	オオムラサキ	チョウ	タテハチョウ	<i>Sasakia charonda</i> (Hewitson)	NT	NT
92	オオヒカゲ	チョウ	タテハチョウ	<i>Ninguta schrenckii</i> (Ménétrières)		NT

情報不足(DD)

No.	和名	目名	科名	学名	国ランク	県ランク
93	ホシシャク	チョウ	シャクガ	<i>Naxa seriaria</i> (Motschulsky)		
94	ヒメウコンエダシャク	チョウ	シャクガ	<i>Corymica arnearia</i> Walker		
95	メンガタスズメ	チョウ	スズメガ	<i>Acherontia styx medusa</i> Moore		
96	オオシモフリズズメ	チョウ	スズメガ	<i>Langia zenzeroides nawai</i> Rothschild et Jordan		
97	エゾスジトウ	チョウ	ヤガ	<i>Doerriessa striata</i> (Staudinger)	VU	NT

(9) クモ類

① 岡崎市におけるクモ類の概況

岡崎市は額田郡額田町と 2006 年 1 月に合併したが、合併前の概要をそれぞれ説明する。岡崎市は愛知県のほぼ中央に位置し、総面積は 226.97 km²である。西から時計回りに安城市・豊田市・額田郡額田町・蒲郡市・額田郡幸田町と隣接する。市役所の位置は北緯 34 度 57 分 13 秒、東経 137 度 10 分 37 秒である。北東部から南部に至り 50~200m のなだらかな丘陵が続き、最北部に独立峰の村積山（標高 256.9m）が位置し、その容姿から三河富士と呼ばれ、一帯は村積山自然公園に指定されている。南東部には蒲郡市や額田郡幸田町との境に桑谷山（標高 435.4m）・遠望峰山（標高 443m）が連山し、豊川市と境に位置する京ヶ峰（標高 256.9m）などの峰々が連なる。遠望峰山一帯は三河湾国定公園に指定されている。長野県下伊那郡を源流とし三河湾にそそぐ一級河川の矢作川は最西部の左岸を流れ、豊田市と境を流れている郡界川は桑原町で巴川と合流し、細川町で本流と合流する。真福寺川・青木川・安藤川・広田川も矢作川水系である。同じく矢作川最大の支流である乙川は、市の中心部を下り天白町で合流する。なかでも殿橋右岸に広がる乙川河川緑地の河川敷は市民の憩いの場となっている。伊賀川・山網川・鉢地川もその支流である。大小のため池沼はほぼ全域に点在するが、とくに南東部に多い。

岡崎市におけるクモ類の報告は、村上 勝先生の「岡崎市の蜘蛛」（村上, 1960）が最初と思われる。「真正蜘蛛類」（須賀, 1985）によると、「愛知学芸大学の卒業論文として岡崎市のクモを研究され 23 科 91 種を報告した。しかし、自己印刷（謄写）で発行部数は少なく、一部の者しか知られていない。」と記述されている。本市教育委員会が 1973 年から 1982 年にかけて、市内の昆虫類や鳥類など動物類を調査し、その研究結果をまとめて冊子が刊行された。そのシリーズ第 8 集で「岡崎市のクモ類」（野沢・板倉, 1982）が出版された。それによると 21 科 81 種が報告されている。2 年後に発刊された『岡崎市史 自然 14』では、新たに調査して得られた種を追加し「岡崎市のクモ類」と題し 26 科 154 種を報告した（野沢, 1985）。筆者は本市より委嘱を受け『おかざき自然体験の森自然環境基礎調査報告書』（2004・2005・2006）の中で「クモ類・多足類」と題し、3 年間の合計で 33 科 175 種のクモ類を報告した。同じく『湿地定期観察調査報告書』（2011・2012・2013）の中で「小呂湿地とその周辺のクモ類」では 3 年間の合計で 30 科 148 種（不明 3 種含む）を、「北山湿地とその周辺のクモ類」では 3 年間の合計で 35 科 149 種（不明 3 種含む）を報告した。筆者が所属する同好会の会誌では以下を報告した。「岡崎市自然体験の森のクモ類」（2006）では 33 科 177 種を、「岡崎市本宮山および一宮町のクモ」（2009）では 12 科 29 種を、「岡崎市桑谷町扇子山のクモ」（2009）では 20 科 60 種（不明種含む）を、「岡崎市桑谷町扇子山と闇苧溪谷のクモ」（2010）で、扇子山では 15 科 46 種（不明種含む）を報告した。筆者は 1988 年から市内各所を調査し、2013 年 11 月現在 41 科 338 種である（緒方, 未発表）。これは愛知県 48 科 566 種（緒方, 2013）の科に対し約 85.4%、種に対し約 59.7%に値する。

旧額田郡額田町は愛知県の南東部に位置し、町役場の位置は北緯 34 度 55 分 09 秒、東経 137 度 17 分 29 秒である（愛知県ホームページより）。総面積は 160.25 km²で岡崎市の東部に位置し、西から時計回りに岡崎市・豊田市・新城市・豊川市に隣接する。町の全域が三河高原からなる山地で、西部から東部に向かって 300~500m の山々が連なり、最北東部に最高峰の本宮山（標高 789m）と巴山（標高 719m）が位置し、一帯は本宮山県立自然公園に指定されている。乙川は千万町町（旧額田郡）を源とし、さらにその支流である富尾川・小久田川・大高味川・毛呂川・大法川・久保川などの水系を成す。男川の最上流部は県下屈指の溪谷美を誇る暗苧溪谷で、生平町で乙川と合流する。

この水系には平針川・奥明見川・鳥川・大原川・夏山川・雨山川など大小 20 を超える支流が存在する。

額田町全域をまとめたクモ類の報告は少なく、最初に報告したのは牛田清彦氏で同好会の会誌に「闇苧溪谷と本宮山のクモ」と題し 5 科 16 種を発表した（牛田, 1972）。筆者も同会誌で以下を報告した。「闇苧溪谷のクモ」（2008）と題し 32 科 102 種（不明種含む）を、「岡崎市桑谷町扇子山と闇苧溪谷のクモ」（2010）で闇苧溪谷では 17 科 39 種（不明種含む）を記録した。筆者は 1988 年から町内各所を調査し、2013 年 9 月現在 37 科 197 種である（緒方, 未発表）。これは愛知県の科に対し約 77.1%、種に対し約 34.8%に値する。

旧岡崎市域と旧額田町域を合わせた新岡崎市のクモ類は、42 科 366 種である（緒方, 未発表）。これは愛知県の科に対し約 87.5%、種に対し約 64.7%に値する。

○ 山地のクモ

本市の約 60%は森林が占めている。とくに北東部は市最高峰の本宮山を筆頭に 700m を超える山が鎮座する。南部も標高 400m 前後の峰が連なっている。本市で記録されたクモ類の約 65%は山地性で、村積山・本宮山・扇子山などはクモ相が豊富である。代表的な科と種を列举するとヒメグモ科オダカグモ・ホシミドリヒメグモ、サラグモ科サイトウヌカグモ・クミスアラグモ、アシナガグモ科ヤマジドウヨウグモ・タニマノドヨウグモ、コガネグモ科イシサワオニグモ・ヤマオニグモ、フクログモ科イナフクログモ・マイコフクログモ、カニグモ科アマギエビスグモ・ガザミグモ、ハエトリグモ科ジャバラハエトリ・ムツバハエトリなど枚挙にいとまがない。特筆すべき種を挙げると、2007 年 9 月 9 日に茅原沢町（神明宮）で記録されたクロマルイソウロウグモと 2008 年 7 月 28 日に桑谷町（扇子山）で記録されたシロゴミグモは県初記録となった。また、2009 年に新種記載されたミカワヤチグモは豊田市六所山が模式産地で、それ以外では、旧旭町（旭高原元気村）と千万町町（愛知県野外教育センター）から記録されたにすぎない。また、クロササヒメグモ・ゴマフコツブグモ・オガタニッポンケシグモなどは県下でも非常に採集例が少ない。

○ 平野部のクモ

本市の北東部から南部にかけて 50~150m のなだらかな丘陵地が広がり、里地里山の自然が随所に残されている。社叢や農耕地も含めて、このような環境には多くのクモ類が生息する。代表種としてはウズグモ科カタハリウズグモ・オウギグモ、ヒメグモ科オナガグモ・コンピラヒメグモ、サラグモ科クロナンキングモ・ヘリジロサラグモ、アシナガグモ科キララシロカネグモ・コシロカネグモ、コガネグモ科アオオニグモ・ヤマシロオニグモ、コモリグモ科フジイコモリグモ・ヤマハリゲコモリグモ、ツチフクログモ科アシナガコマチグモ・ヤサコマチグモ、ネコグモ科コムラウラシマグモ・ウラシマグモ、エビグモ科アサヒエビグモ・ヤドカリグモ、ハエトリグモ科デーニツハエトリ・チャイロアサヒハエトリなどが挙げられる。県内でも記録の少ない種としてはアイチマシラグモ・オキツハネグモ・シラホシオオノヒメグモ・トガリクサチヒメグモ・クロササヒメグモ・ヨロイヒメグモ・ヨドテナガグモ・ハナサラグモなどが挙げられる。

○ 河川・湿地のクモ

矢作川本流の天神橋から下流の美矢井橋にかけて、河川敷は草本類や河畔林が繁茂し緑の回廊になっている。このような環境には以下の科と種が挙げられる。センショウグモ科センショウグモ、ウズグモ科マネギグモ、ヒメグモ科カグヤヒメグモ・アシプトヒメグモ、サラグモ科ヘリジロサラグモ・ツノケシグモ、アシナガグモ科トガリアシナガグモ・ウロコアシナガグモ、コモリグモ科ウヅキコモリグモ・ハリゲコモリグモ、ササグモ科ササグモ・クリチャササグモ、シボグモ科シボグ

モ、タナグモ科クサグモ・コクサグモ、ツチフクログモ科ヤマトコマチグモ、フクログモ科ヒメフクログモ・ミチノクコマチグモ、カニグモ科ハナグモ・ヤミイロカニグモ、ハエトリグモ科マミジロハエトリ・キレワハエトリなどが生息する。

矢作川の支流である巴川や乙川には多数の水系が存在する。上流部の溪流にはカラカラグモ科ナルコグモ、ヨリメグモ科ヨリメグモ、アシナガグモ科オオシロカネグモ・タニマノドヨウグモ・メガネドヨウグモ、コモリグモ科クラークコモリグモ・ナミコモリグモ、キシダグモ科アオグロハシリグモなどの水辺のクモが生息する。市内には貴重な湿地も点在する。なかでも小呂湿地（小呂町）と北山湿地（池金町）は貴重な植物が自生し手厚く保護されている。筆者は両湿地を数年間調査し、現在も継続中である。小呂湿地ではヤマトコツブグモ・チュウガタシロカネグモ・ヒノマルコモリグモ・コウライタンボグモなど 17 科 52 種を（緒方, 2013）、北山湿地ではヒゲナガヤリグモ・クラークコモリグモ・スジアカハシリグモ・エビチャヨリメケムリグモなど 17 科 52 種を確認している（緒方, 2013）。

② 岡崎市における絶滅危惧種の概況

今回岡崎市として、絶滅危惧に取りあげられたクモ類は、絶滅危惧 I A 類（CR）が 3 種、絶滅危惧 I B 類（EN）が 5 種、絶滅危惧 II 類（VU）が 14 種、準絶滅危惧（NT）が 4 種、情報不足（DD）が 1 種の合計 27 種である。これは岡崎市産 366 種（緒方, 未発表）の約 7.4% に値する。愛知県における絶滅危惧種のリストは CR が 2 種、EN が 15 種、VU が 12 種、NT が 4 種、DD が 1 種の合計 34 種類である（愛知県環境調査センター, 2009）。これは愛知県産 566 種（緒方, 2013）の約 6% で、値は本市が僅かに上回る。愛知県レッドリストの掲載種で、本市では記録されていない種は以下の通りである。CR ではミカワホラヒメグモの 1 種、EN ではシロタマヒメグモ・キヌキリグモ・キノボリキヌキリグモ・コケオニグモ・ムツトゲイセキグモ・ツシマトリノフンダマシ・ワクドツキジグモ・シノビグモ・カトウツケオグモの 9 種、DD ではムロズミソレグモの 1 種で合計 11 種である。逆に本市に対し愛知県での未指定種は EN がイサゴコモリグモの 1 種、VU がヤマトヤギヌマグモ・ユノハマヒメグモ・カワベコモリグモの 3 種、DD がアイチアリマネグモの 1 種で合計 4 種である。

「環境省第 4 次レッドリスト（その他無脊椎動物）」（環境省, 2012）によると、CR+EN が 1 種、VU が 6 種、NT が 5 種、DD が 5 種の合計 17 種である。その中で本市のリストにあげているカネコトタテグモ・キシノウエトタテグモ・キノボリトタテグモ・ワスレナグモの 4 種は準絶滅危惧（NT）にランクされている。

本市で取りあげられた種の主な減少の要因を考察すると、土地開発・道路拡張工事・河川工事・伐採工事・農薬や殺虫剤の散布などの影響によるものが大きいと思われる。とくに極限られた環境、つまり崖地・古木・溪流・湿地など特異な環境にのみ生息するアケボノユウレイグモ・テジロハリゲコモリグモ・アワセグモ・キシノウエトタテグモ・チクニドヨウグモ・イサゴコモリグモ・ミナミコモリグモ・カネコトタテグモ・キノボリトタテグモ・ユノハマヒメグモ・カワベコモリグモなどである。さらに、一見どこにでもあるような環境だが、我々には把握できない微妙な環境の変化で生息できなくなってしまうこともある。キジロオヒキグモ・マメイタイセキグモ・ヤマトヤギヌマグモ・ニシキオニグモ・シロオビトリノフンダマシ・アカイロトリノフンダマシ・トゲグモ・オビジガバチグモ・アシナガカニグモ・オビボソカニグモ・コガネグモ・トリノフンダマシ・オオトリノフンダマシなどである。なお、2011 年に新種記載されたアイチマシラグモはおもに丘陵地の雑

木林や山林の落葉層に生息する。模式産地は本市奥山田町（村積山）だが、安戸町でも記録している。県内では犬山市・小牧市・日進市・豊田市・豊川市などから散発的に記録されているが、分布や生態などに不明な点が多いので情報不足にランクされた。

(①及び②執筆者 緒方清人)

③ 岡崎市クモ類レッドリスト

目及び科の範囲、名称、配列は、原則として「日本産クモ類目録 Ver.2013 R2」（谷川明男, 2013 : インターネット上にて公表）を基に、新しい知見を加え整理した。

絶滅(EX)

(該当種なし)

絶滅危惧 I A類(CR)

No.	和名	目名	科名	学名	国ランク	県ランク
1	アケボノユレイグモ	クモ	ユレイグモ	<i>Belisana akebona</i> (Komatsu)		CR
2	テジロハリゲコモリグモ	クモ	コモリグモ	<i>Pardosa yamanoi</i> Tanaka et Suwa		EN
3	アワセグモ	クモ	アワセグモ	<i>Selenops bursarius</i> Karsch		VU

絶滅危惧 I B類(EN)

No.	和名	目名	科名	学名	国ランク	県ランク
4	キシノウエトタテグモ	クモ	トタテグモ	<i>Latouchia typica</i> (Kishida)	NT	EN
5	チクニドヨウグモ	クモ	アシナガグモ	<i>Metleucauge chikunii</i> Tanikawa		EN
6	キジロオヒキグモ	クモ	コガネグモ	<i>Arachnura logio</i> Yaginuma		EN
7	マメイタイセキグモ	クモ	コガネグモ	<i>Ordgarius hobsoni</i> (O. P.-Cambridge)		EN
8	イサゴコモリグモ	クモ	コモリグモ	<i>Pardosa isago</i> Tanaka		EN

絶滅危惧 II類(VU)

No.	和名	目名	科名	学名	国ランク	県ランク
9	ワスレナグモ	クモ	ジグモ	<i>Calommata signata</i> Karsch	NT	VU
10	カネコトタテグモ	クモ	カネコトタテグモ	<i>Antrodiaetus roretzi</i> (L. Koch)	NT	VU
11	キノボリトタテグモ	クモ	トタテグモ	<i>Conothele fragaria</i> (Dönitz)	NT	VU
12	ヤマトヤギヌマグモ	クモ	ヤギヌマグモ	<i>Telega nipponica</i> (Yaginuma)		
13	ユノハマヒメグモ	クモ	ヒメグモ	<i>Yunohamella yunohamensis</i> (Bösenberg et Strand)		
14	ニシキオニグモ	クモ	コガネグモ	<i>Araneus variegatus</i> Yaginuma		VU
15	シロオビトリノフンダマシ	クモ	コガネグモ	<i>Cyrtarachne nagasakiensis</i> Strand		VU
16	アカイロトリノフンダマシ	クモ	コガネグモ	<i>Cyrtarachne yunoharuensis</i> Strand		VU
17	トゲグモ	クモ	コガネグモ	<i>Gasteracantha kuhli</i> C. L. Koch		VU
18	カワベコモリグモ	クモ	コモリグモ	<i>Arctosa kawabe</i> Tanaka		
19	ミナミコモリグモ	クモ	コモリグモ	<i>Piratula meridionalis</i> (Tanaka)		VU
20	オビジガバチグモ	クモ	ネコグモ	<i>Castianeira shaxianensis</i> Gong		VU
21	アシナガカニグモ	クモ	カニグモ	<i>Heriaeus melloteei</i> Simon		VU
22	オビボソカニグモ	クモ	カニグモ	<i>Xysticus trizonatus</i> Ono		VU

準絶滅危惧(NT)

No.	和名	目名	科名	学名	国ランク	県ランク
23	コガネグモ	クモ	コガネグモ	<i>Argiope amoena</i> L. Koch		NT
24	トリノフンダマシ	クモ	コガネグモ	<i>Cyrtarachne bufò</i> (Bösenberg et Strand)		NT
25	オオトリノフンダマシ	クモ	コガネグモ	<i>Cyrtarachne akirai</i> Tanikawa		NT
26	ゲホウグモ	クモ	コガネグモ	<i>Poltys illepidus</i> C. L. Koch		NT

情報不足(DD)

No.	和名	目名	科名	学名	国ランク	県ランク
27	アイチアリマネグモ	クモ	サラグモ	<i>Solenysa ogatai</i> Ono		

(10) 貝 類

① 岡崎市における貝類の概況

○ 陸産貝類

岡崎市は三河山と岡崎平野の接点に位置し、額田町を併合したことにより、旧岡崎市と比べると山地部が多くなり、陸産貝類の生息環境としては比較的多様である。ただし、石灰岩地やブナの原生林など愛知県内としては独特な生息環境はないので、岡崎市固有種や特に多様性の高い生息地は確認されていない。岡崎市の陸産貝類の生息種数については、旧岡崎市で原田が調査した 12 科 34 種が最初の記録で（永井, 1975）、その後山田（1991）により旧岡崎市内で 10 科 41 種（亜種や同種とされている種は統合した種数）が記録されている。現在の額田町まで含めた岡崎市の陸産貝類相の総合的な報告はない。木村（2000）により岡崎市内からカタママイマイが愛知県初記録として報告され、今回のレッドデータブックによる基礎調査では、ハチノコギセル等が新たに発見された。また、守谷（2012）によるキバサナギガイ科のナガタネガイを加えると、15 科約 50 種が生息していると考えられる。豊田市では稲武町など 7 市町村が合併した後の最新の調査（川瀬ほか, 2011）では 14 科 47 種（古い記録を全て総合するとさらに 30 種が増加する）が記録されているので、面積の違いなどを考慮しても、岡崎市の陸産貝類相は比較的豊かであるといえる。市街地や平野部には人家周辺、畑地、草地を中心にチャコウラナメクジ（移入種）、オナジマイマイ（移入種）、ウスカワマイマイ、人家周辺の植栽、林にはナミコギセル、オカチョウジガイ、トクサオカチョウジガイ（移入種）が広く分布している。丘陵部から山地にかけての自然林内は乾燥化が激しいところが多く、また竹林が拡大して陸産貝類の生息環境としては必ずしも好適な環境は多くない。よく保全された河川沿いの自然林内や寺社林は湿度が保たれており陸産貝類相は比較的豊かで、朽木や落葉下にキセルガイ類、オオケマイマイ、ヒラマイマイ、ピロウドマイマイなどが生息しているが、いずれの個体数も少ない。旧額田町域の山地部は稲武町から設楽郡の山地に見られる陸産貝類相と連続性があり、ツムガタギセル（従来ツムガタモドキギセルと報告されることが多かった大型個体群：本文解説参照）、ミヤマヒダリマキマイマイなどが記録され、石原町の田原坂の自然林内からはハチノコギセルの生息が確認された。三河山は、関東から関西にかけて分布するミヤマヒダリマキマイマイ種群（ミヤマヒダリマキマイマイーミカワマイマイーヒラヒダリマキマイマイ）の移行地域になっていて生物地理上注目される。ミヤマヒダリマキマイマイ種群は愛知県では稲武町から設楽町、新城市、豊橋市にかけて分布するが、岡崎市におけるミヤマヒダリマキマイマイ生息地はその分布域の南西端にあたり注目される。

○ 淡水産貝類

岡崎市平野部には矢作川を最大の水系として、乙川など大きな支流、小河川、用水路、ため池が多く、元来は豊かな淡水貝類相を持つ琵琶湖水系との関わりのある淡水貝類が生息していた（愛知県科学教育センター, 1967; 永井, 1985）。しかし、豊かな淡水貝類相が保存されていたのは 1960 年代までで平野部を中心とした都市化の影響は著しく、1970 年以降平野部の水系は各種排水によって富栄養化し、水質汚濁が進行するに伴って淡水貝類の生息状況は著しく悪化した。また河川改修工事、埋め立て工事によって生息場所自体が消失した水域も多い。

岡崎市から記録されている淡水産貝類は 11 科 22 種でそのうち 6 種は外来種である。近隣の貝類相から考えてイシガイ科貝類のオバエボシガイ、ヨコハマシジラガイ、カタハガイがかつて生息していた可能性は否定できないが、過去の記録や収蔵されている標本類を検討した限り、生息の事実は確認されなかった。なお 3 種とも愛知県版レッドデータブック（愛知県環境調査センター, 2009）

では絶滅種と判断されている。イシガイ科貝類に代表される、比較的水温が高く緩やかな流れに生息する淡水貝類の生息状況はほとんど壊滅的で、さらにカワヒバリガイ、サカマキガイ、ハブタエモノアラガイ、カネツケシジミ（タイワンシジミ黄色型）など外来種も繁殖し、在来種に対する影響が心配され、絶滅が危惧される種は多い。

河川上流域には元々淡水産貝類は少なく、岡崎市ではカワニナ科のカワニナ 1 種が知られる。中流域から下流域にはチリメンカワニナが分布する。チリメンカワニナは幸い乙川水系を中心に現在も多産する。平野部から丘陵にかけての水質の良いため池には現在でもオオタニシ、ドブガイが生息している。平野部の水田に多産し食用にも利用されていたマルタニシは水田耕作の変化や前述のような生息環境の悪化で現在の生息場所は非常に限られている。

② 岡崎市における絶滅危惧種の概況

○ 陸産貝類

今回、岡崎市で絶滅のおそれがあると判断された陸産貝類は、絶滅（EX）0 種、絶滅危惧 I A 類（CR）1 種、絶滅危惧 I B 類（EN）0 種、絶滅危惧 II 類（VU）3 種、準絶滅危惧（NT）3 種、情報不足（DD）2 種の合計 9 種で、岡崎市で生息記録がある陸産貝類約 50 種（亜種を含む）のうち約 18%に相当し、多くの種が危険な状況にあると判断された。今回絶滅危惧種に指定した 9 種のうち 5 種は、環境省（国）のレッドリストに掲載されている種である。

今回最もランクの高かった絶滅危惧 I A 類（CR）にはミヤマヒダリマキマイマイが選定された。本種は自然林内の湿度の高い谷筋の重なった石の周辺に生息し、個体数は元々少なく、生息環境は破壊されやすい。前述の通り岡崎市の生息域は本種群の地理的分布上も貴重である。

絶滅危惧 II 類（VU）には環境省および愛知県レッドデータブックにも掲載されているミカワギセル、ハチノコギセルのキセルガイ科 2 種が選定された。環境省では情報不足（DD）、愛知県では掲載されていないピロウドマイマイが今回、絶滅危惧 II 類（VU）に選定されたが、近年の分類学的な検討の進展に伴い種名が確定し（早瀬・多田, 2005；早瀬・多田, 2008）、市内での詳細な分布調査が進められた結果、今回、絶滅が危惧される種として認識された。

準絶滅危惧（NT）には環境省および愛知県レッドデータブックにも掲載されているナガオカモノアラガイが選定され、両者に掲載されていないホソヤカギセル、ツムガタギセルのキセルガイ科 2 種が選定されたが、この 2 種ともに陸産貝類としては大型でモニタリングしやすいにもかかわらず、岡崎市内では過去の記録と比較して生息地点数、個体数とも顕著な減少が認められたので、準絶滅危惧種に選定された。

○ 淡水産貝類

今回、岡崎市で絶滅のおそれがあると判断された淡水産貝類は、絶滅（EX）0 種、絶滅危惧 I A 類（CR）3 種、絶滅危惧 I B 類（EN）0 種、絶滅危惧 II 類（VU）1 種、準絶滅危惧（NT）3 種の合計 7 種で、岡崎市で生息記録がある淡水産貝類の在来種 16 種のうち約 44%に相当し、きわめて多くの種が危険な状況にあると判断された。今回レッドリストに選定された 7 種のうちイシガイ・ドブガイを除く 5 種は、環境省のレッドリストにも掲載されている種である。

前項の概況で述べたとおり岡崎市内の淡水産貝類の生息状況は極めて深刻で、特に河川下流域や平野部の水路、支流を生息場所とする貝類は危機的生息状況である。

今回最もランクの高かった絶滅危惧 I A 類（CR）にはイシガイ・マツカサガイ・トンガリササノハガイのイシガイ科 3 種が選定された。このうち後 2 種は環境省のランクは NT で、イシガイに関

してはランク外である。前述した通り、岡崎市のイシガイ科貝類の生息状況は全国と比較しても危機的で、永井（1985）および木村（1994）の報告や今回の基礎調査によっても現在市内における生息場所は非常に少ない。またそれぞれの生息地でもかろうじて生き残った小規模な個体群が確認されたにすぎず、環境省のランクより高く評価された。

絶滅危惧Ⅱ類（VU）には環境省および愛知県レッドデータブックにも掲載されているマシジミが選定された。マシジミはかつては市内の平野部の河川、湖沼にごく普通に生息していた種であったが、1990年代にカネツケシジミ（タイワンシジミの黄色型）が愛知県にも移入、定着し、マシジミ分布域の多くで、移入したカネツケシジミと置き換わっていることが確認された。マシジミは広域に分布していた種であるので健全な生息地は残っていると思われたが、2006年からの調査では、河川下流域、大きな水系とつながった小河川、水路等には、カネツケシジミが定着し、マシジミはほとんど見られなくなった。岡崎市内でカネツケシジミが大繁殖している水域は認められなかったが、マシジミと確実に同定できる個体のみが生息する場所は、今回の基礎調査では、丘陵部の湧水を源流とする小河川2ヶ所だけにとどまった。

準絶滅危惧（NT）には環境省および愛知県レッドデータブックにも掲載されているマルタニシ、モノアラガイが選定され、両者に掲載されていないイシガイ科のドブガイが選定された。ドブガイについては、丘陵部のため池などに生息地は散在するが、前述したとおり市内における河川下流域のイシガイ科貝類全般の危機的生息状況により準絶滅危惧種と判断された。

（①及び②執筆者 木村昭一）

③ 岡崎市貝類レッドリスト

目及び科の範囲、名称、配列は、原則として「日本産野生生物目録—本邦産野生動植物の種の現状—（無脊椎動物編Ⅲ）」（財団法人自然環境研究センター、1998）を基に、新しい知見を加え整理した。また、各種の生息環境区分（陸：陸産貝類、淡水：淡水産貝類）を示した。

絶滅(EX)

(該当種なし)

絶滅危惧ⅠA類(CR)

No.	区分	和名	目名	科名	学名	国ランク	県ランク
1	陸	ミヤマヒダリマキマイマイ (ヒラヒダリマキマイマイ)	マイマイ(柄眼)	オナジマイマイ	<i>Euhadra scaevola scaevola</i> (Martens) (<i>E. s. interioris</i> Pilsbry)	VU	VU
2	淡水	イシガイ	イシガイ	イシガイ	<i>Unio douglasiae nipponensis</i> (Martens)		CR
3	淡水	マツカサガイ	イシガイ	イシガイ	<i>Inversidens japonensis</i> (Lea)	NT	CR
4	淡水	トンガリササノハガイ	イシガイ	イシガイ	<i>Lanceolaria grayana cuspidata</i> Kira	NT	CR

絶滅危惧ⅠB類(EN)

(該当種なし)

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

No.	区分	和名	目名	科名	学名	国ランク	県ランク
5	陸	ミカワギセル	マイマイ(柄眼)	キセルガイ	<i>Mesophaedusa hickonis mikawa</i> (Pilsbry)	NT	NT
6	陸	ハチノコギセル	マイマイ(柄眼)	キセルガイ	<i>Mundiphaedusa kawasakii</i> (Koroda)	NT	NT
7	陸	ピロウドマイマイ	マイマイ(柄眼)	ナンパンマイマイ	<i>Nipponochloritis oscitans</i> (Martens)	DD	
8	淡水	マシジミ	マルスダレガイ	シジミ	<i>Corbicula leana</i> Prime	VU	VU

準絶滅危惧(NT)

No.	区分	和名	目名	科名	学名	国ランク	県ランク
9	陸	ナガオカモノアラガイ	マイマイ(柄眼)	オカモノアラガイ	<i>Oxyloma hirasei</i> (Pilsbry)	NT	NT
10	陸	ホソヤカギセル	マイマイ(柄眼)	キセルガイ	<i>Mundiphaedusa hosayaka</i> (Pilsbry)		
11	陸	ツムガタギセル	マイマイ(柄眼)	キセルガイ	<i>Pinguiphaedusa pinguis platydera</i> (Martens)		

12	淡水	マルタニシ	盤足	タニシ	<i>Cipangopaludina chinensis laeta</i> (v.Martens)	VU	NT
13	淡水	モノアラガイ	モノアラガイ(基眼)	モノアラガイ	<i>Radix auricularia japonica</i> Jay	NT	NT
14	淡水	ドブガイ	イシガイ	イシガイ	<i>Anodonta woodiana</i> (Lea)		NT

情報不足(DD)

No.	区分	和名	目名	科名	学名	国ランク	県ランク
15	陸	ナガナタネガイ	マイマイ(柄眼)	キバサナギガイ	<i>Columella edentula</i> (Draparnaud)		LP
16	陸	カタマメマイマイ	マイマイ(柄眼)	オナジマイマイ	<i>Lepidopisum conospira</i> (Pfeiffer)		VU